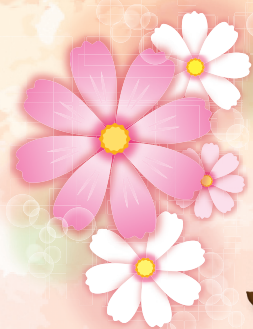


令和6年度




温かい手



●愛の輪ポスター ●障害者週間のポスター ●福祉体験作文 ●心の輪を広げる体験作文



 ふれあいのまち KOBE ・ 愛の輪運動推進委員会

 神戸市

 社会福祉法人 神戸市社会福祉協議会

福祉の心を育む市民運動

ふれあいのまち KOBE・愛の輪運動

愛の輪運動ってなに？

ソーシャル・インクルージョン（社会的包摂：だれもが潜在能力を発揮できる役割を持ってつながり合う地域社会づくり）の理念に基づき、人と人とのふれあいの中で「思いやり」「譲り合い」「助け合い」等の福祉の心を育み、身近なところから福祉の実践につなげ、「ともに生きる」地域社会づくりを目指した神戸の市民運動です。

愛の輪運動の取り組み

●中・高生の福祉体験学習（ワークキャンプ）

市内の中・高生を対象に夏休み中の3日間、自ら進んで福祉施設での体験学習をすることにより、福祉の心を培う取り組みを行っています。



●障がいサポーター養成講座

共に生きる社会を目指して、様々な障がいに関する正しい知識と学び、理解を広げる取り組みを行っています。



●愛の輪ポスターの募集

市内の小・中・高校生を対象に、福祉にまつわる身近な出来事に関心を向けることを目的に「福祉の心」をテーマにした作品を募集しています。



●ボランティア活動の推進

お住まいの区など身近な地域で、幅広いボランティア活動への参加を推進しています。



目次



愛の輪ポスター・障害者週間のポスター.....	2
福祉体験学習（ワークキャンプ）活動の様子.....	9
福祉体験学習（ワークキャンプ）参加状況.....	11
福祉体験作文.....	12
心の輪を広げる体験作文.....	33



令和6年度 愛の輪ポスター入賞者

応募作品数		
	総数	障害者週間のポスター
小学生	365	(200)
中学・高校	96	(25)
合計	461	(225)

最優秀賞

【小学生の部】

神戸市立高羽小学校 6年 春名希紗

【中学生の部】

神戸市立横尾中学校 3年 山口玲奈

優秀賞

【小学生の部】

神戸市立桂木小学校 2年 谷口結梨

神戸市立兵庫大開小学校 2年 小野覚司

【中学生の部】

神戸市立広陵中学校 2年 西山莉央

神戸市立筒井台中学校 3年 岩野岐十郎

佳作

【小学生の部】

神戸市立中央小学校 1年 大内みう

神戸市立本庄小学校 2年 野並善

神戸市立高羽小学校 3年 村尾鴻

神戸市立井吹西小学校 3年 田邊心晴

神戸市立糀台小学校 5年 松村和奏

神戸市立渦が森小学校 6年 野村彩衣

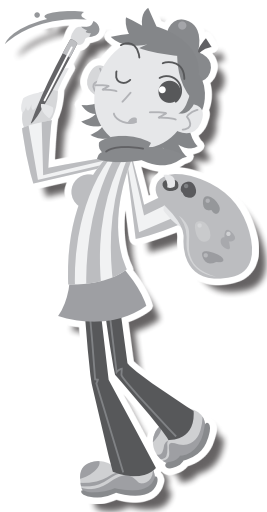
【中学生・高校生の部】

神戸市立西代中学校 1年 古瀬咲紅

神戸市立広陵中学校 2年 寺尾魁莉

神戸市立広陵中学校 2年 山迫未乃莉

神戸市立太山寺中学校 2年 加藤衣栞



令和6年度 障害者週間のポスター入賞者

小学生の部

神戸市立中央小学校 1年 長浜凛

中学生の部

神戸市立御影中学校 3年 高橋結和

※本作品は内閣府での審査の結果、佳作(中学生区分)を受賞しています。

令和
6年度

愛の輪ポスター 入賞作品

最優秀賞

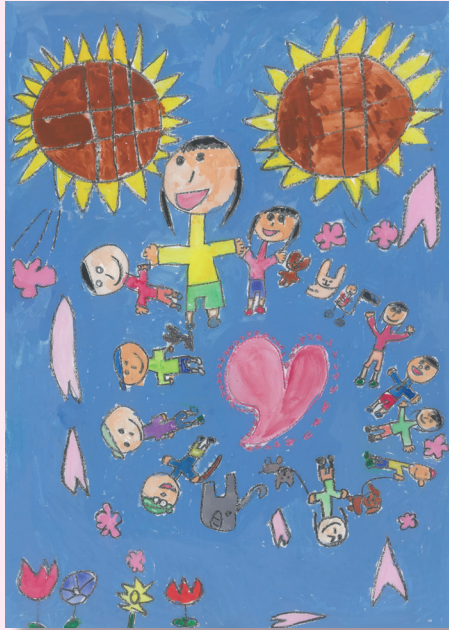


神戸市立高羽小学校 6年
春名希紗



神戸市立横尾中学校 3年
山口玲奈

優秀賞



神戸市立桂木小学校 2年
谷口結梨



神戸市立兵庫大開小学校 2年
小野覚司



神戸市立広陵中学校 2年
西山莉央

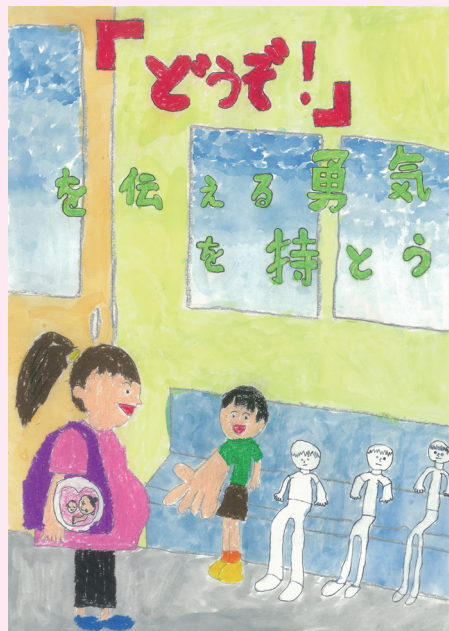


神戸市立筒井台中学校 3年
岩野岐十郎

佳作



神戸市立中央小学校 1年
大内 みう



神戸市立高羽小学校 3年
村尾 鴻



神戸市立本庄小学校 2年
野並 善

佳作



神戸市立井吹西小学校 3年
田邊心晴



神戸市立鞆台小学校 5年
松村和奏



神戸市立渦が森小学校 6年
野村彩衣



神戸市立西代中学校 1年
古瀬咲紅



佳作



神戸市立広陵中学校 2年
寺尾 魁 莉



神戸市立広陵中学校 2年
山 迫 未乃莉



神戸市立太山寺中学校 2年
加 藤 衣 菜



令和
6年度

障害者週間のポスター 入賞作品

小学生の部



神戸市立中央小学校 1年
長 浜 凜

中学生の部

内閣府 佳作
受賞作品



神戸市立御影中学校 3年
高 橋 結 和

福祉体験学習(ワークキャンプ)活動の様子

ワークキャンプとは…

市内在学の中・高校生が夏休み中に保育・児童・高齢・障害の福祉施設で福祉体験を行い、活動を通して、人とのつながりや社会生活の大切さを経験し、「共に生き」「共に学び」「共に育つ」ことへの理解と行動力つちかを培います。

児童館



小さい子どもに勉強を教えるという貴重な体験ができました。



一生懸命考えて遊んでいました。



学童の子たちとたくさん思い出をつくらせて楽しかったです！



久しぶりにボードゲームができて新鮮でした。子どもたちと遊ぶのも楽しかったです。



小学生と一緒に遊んで楽しめました。



今までに体験したことがないことをたくさん体験することが出来て、良い機会になりました。

障害者福祉施設



実際に仕事を体験し、学べることも多く、とても楽しかったです。



利用者さんとたくさん話をする事ができました。



いろんな話を聞けて、楽しかったのでまた行きたいです。



利用者さんと仲良くダンス!!



将来のためになる濃い3日間でした!!





高齢者福祉施設



すごく良い体験になりました。とても素晴らしい方たちと過ごすことができ楽しかったです。



たくさんのことが学べた3日間でした。夢に向かって頑張る気持ちになりました。



寄り添いながら楽しく会話



とても良い経験になりました！

保育所（園）・こども園



みんなとても元気とてもかわいかったです。



身近で幼児の成長を見ることができ、とても良い経験になりました。



「お姉ちゃん遊ぼ」と言ってくれてうれしかったよ。3日間楽しかったね。



子どもたちがとても可愛かったです。



「見て見て!」とたくさん話しかけてくれ、嬉しかったです。



子どもたちの笑顔を見ると幸せな気持ちになりました。



子どもたちの笑顔がすてきでした。



みんながいっしょけんめいに遊んでいてかわいかったです。



令和6年度 福祉体験学習（ワークキャンプ）参加状況

1. 福祉体験学習参加人数（参加 114 校）

	日程	中学生	高校生	参加人数
1 期	7月24、25、26日	170	225	395
2 期	7月30、31日、8月1日	165	236	401
3 期	8月5、6、7日	126	109	235
合 計（延べ人数）		461	570	1,031

2. 受入施設数

施設種別	施設数
1. 保育所（園）・認定こども園	181
2. 児童館・学童保育	84
3. 障がい者施設	27
4. 高齢者施設	58
合 計	350

3. 福祉体験学習参加人数と受け入れ施設数の移り変わり

	中学生	高校生	合 計	受入施設数		中学生	高校生	合 計	受入施設数																																																																																																																
平成元年度	27	10	37	16	ワークキャンプが 始まる 1期制 ↓ 2期制 ↓ 3期制 ↓ 4期制 ↓ 2期制 ↓ 2期制	平成20年度	533	445	978	286	3期制 ↓ 受入可 回答施設 426 受入可 回答施設 411																																																																																																														
2年度	121	62	183	30		3年度	332	117	449	118		4年度	635	275	910	180	5年度	1,408	442	1,850	275	6年度	1,326	505	1,831	302	7年度	1,726	685	2,411	269	8年度	1,856	715	2,571	314	9年度	2,302	1,031	3,333	326	10年度	2,298	1,177	3,475	372	11年度	1,389	1,177	2,566	376	12年度	1,463	1,118	2,581	397	13年度	1,305	1,035	2,340	431	14年度	1,531	1,309	2,840	402	15年度	1,054	978	2,032	371	16年度	794	944	1,738	334	17年度	688	667	1,355	326	18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350
3年度	332	117	449	118		4年度	635	275	910	180		5年度	1,408	442	1,850	275	6年度	1,326	505	1,831	302	7年度	1,726	685	2,411	269	8年度	1,856	715	2,571	314	9年度	2,302	1,031	3,333	326	10年度	2,298	1,177	3,475	372	11年度	1,389	1,177	2,566	376	12年度	1,463	1,118	2,581	397	13年度	1,305	1,035	2,340	431	14年度	1,531	1,309	2,840	402	15年度	1,054	978	2,032	371	16年度	794	944	1,738	334	17年度	688	667	1,355	326	18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350					
4年度	635	275	910	180		5年度	1,408	442	1,850	275		6年度	1,326	505	1,831	302	7年度	1,726	685	2,411	269	8年度	1,856	715	2,571	314	9年度	2,302	1,031	3,333	326	10年度	2,298	1,177	3,475	372	11年度	1,389	1,177	2,566	376	12年度	1,463	1,118	2,581	397	13年度	1,305	1,035	2,340	431	14年度	1,531	1,309	2,840	402	15年度	1,054	978	2,032	371	16年度	794	944	1,738	334	17年度	688	667	1,355	326	18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350										
5年度	1,408	442	1,850	275		6年度	1,326	505	1,831	302		7年度	1,726	685	2,411	269	8年度	1,856	715	2,571	314	9年度	2,302	1,031	3,333	326	10年度	2,298	1,177	3,475	372	11年度	1,389	1,177	2,566	376	12年度	1,463	1,118	2,581	397	13年度	1,305	1,035	2,340	431	14年度	1,531	1,309	2,840	402	15年度	1,054	978	2,032	371	16年度	794	944	1,738	334	17年度	688	667	1,355	326	18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350															
6年度	1,326	505	1,831	302		7年度	1,726	685	2,411	269		8年度	1,856	715	2,571	314	9年度	2,302	1,031	3,333	326	10年度	2,298	1,177	3,475	372	11年度	1,389	1,177	2,566	376	12年度	1,463	1,118	2,581	397	13年度	1,305	1,035	2,340	431	14年度	1,531	1,309	2,840	402	15年度	1,054	978	2,032	371	16年度	794	944	1,738	334	17年度	688	667	1,355	326	18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																				
7年度	1,726	685	2,411	269		8年度	1,856	715	2,571	314		9年度	2,302	1,031	3,333	326	10年度	2,298	1,177	3,475	372	11年度	1,389	1,177	2,566	376	12年度	1,463	1,118	2,581	397	13年度	1,305	1,035	2,340	431	14年度	1,531	1,309	2,840	402	15年度	1,054	978	2,032	371	16年度	794	944	1,738	334	17年度	688	667	1,355	326	18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																									
8年度	1,856	715	2,571	314		9年度	2,302	1,031	3,333	326		10年度	2,298	1,177	3,475	372	11年度	1,389	1,177	2,566	376	12年度	1,463	1,118	2,581	397	13年度	1,305	1,035	2,340	431	14年度	1,531	1,309	2,840	402	15年度	1,054	978	2,032	371	16年度	794	944	1,738	334	17年度	688	667	1,355	326	18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																														
9年度	2,302	1,031	3,333	326		10年度	2,298	1,177	3,475	372		11年度	1,389	1,177	2,566	376	12年度	1,463	1,118	2,581	397	13年度	1,305	1,035	2,340	431	14年度	1,531	1,309	2,840	402	15年度	1,054	978	2,032	371	16年度	794	944	1,738	334	17年度	688	667	1,355	326	18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																			
10年度	2,298	1,177	3,475	372		11年度	1,389	1,177	2,566	376		12年度	1,463	1,118	2,581	397	13年度	1,305	1,035	2,340	431	14年度	1,531	1,309	2,840	402	15年度	1,054	978	2,032	371	16年度	794	944	1,738	334	17年度	688	667	1,355	326	18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																								
11年度	1,389	1,177	2,566	376		12年度	1,463	1,118	2,581	397		13年度	1,305	1,035	2,340	431	14年度	1,531	1,309	2,840	402	15年度	1,054	978	2,032	371	16年度	794	944	1,738	334	17年度	688	667	1,355	326	18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																													
12年度	1,463	1,118	2,581	397		13年度	1,305	1,035	2,340	431		14年度	1,531	1,309	2,840	402	15年度	1,054	978	2,032	371	16年度	794	944	1,738	334	17年度	688	667	1,355	326	18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																																		
13年度	1,305	1,035	2,340	431		14年度	1,531	1,309	2,840	402		15年度	1,054	978	2,032	371	16年度	794	944	1,738	334	17年度	688	667	1,355	326	18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																																							
14年度	1,531	1,309	2,840	402		15年度	1,054	978	2,032	371		16年度	794	944	1,738	334	17年度	688	667	1,355	326	18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																																												
15年度	1,054	978	2,032	371		16年度	794	944	1,738	334		17年度	688	667	1,355	326	18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																																																	
16年度	794	944	1,738	334		17年度	688	667	1,355	326		18年度	611	627	1,238	313	19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																																																						
17年度	688	667	1,355	326		18年度	611	627	1,238	313		19年度	532	496	1,028	298	令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																																																											
18年度	611	627	1,238	313		19年度	532	496	1,028	298		令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																																																																
19年度	532	496	1,028	298		令和元年度	724	881	1,605	389		2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																																																																					
令和元年度	724	881	1,605	389	2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																																																																												
2年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止				3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																																																																																	
3年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)				4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																																																																																						
4年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)				5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																																																																																											
5年度	551	646	1,196	362	6年度	461	570	1,031	350																																																																																																																
6年度	461	570	1,031	350																																																																																																																					

※令和2～4年度は新型コロナウイルス感染症の為中止



福祉体験作文

応募作品数

中学生の部	104点
高校生の部	191点
合計	295点

最優秀賞

【中学生の部】

寄り添うということ 神戸市立有野中学校 3年 坂本優生奈…………… 13

【高校生の部】

「知る」 神戸市立六甲アイランド高等学校 3年 高田 莉愛…………… 14

優秀賞

【中学生の部】

一人一人によりそって 神戸市立本山南中学校 1年 藤村 茉穂…………… 15

誰もが楽しく暮らすために 神戸国際中学校 3年 黒岩さらさ…………… 16

【高校生の部】

ワークキャンプを終えて 兵庫県立須磨友が丘高等学校 2年 土方 音愛…………… 17

「人を支える」ということ 神戸常盤女子高等学校 3年 行天 綾那…………… 18

優良賞

【中学生の部】

ワークキャンプで得た宝物 甲南女子中学校 1年 葛原悠莉奈…………… 19

保育士を体験して 神戸市立有馬中学校 2年 三島 千和…………… 20

秘密のコミュニケーション 神戸国際中学校 2年 中島 楓花…………… 21

【高校生の部】

「ありがとう」この一言で 甲南女子高等学校 1年 光田 圭那…………… 21

対話の奥深さ 神戸海星女子学院高等学校 1年 金子亜耶伽…………… 23

高齢者福祉施設で活動して 神戸国際高等学校 1年 菅 愛葉…………… 24

佳作

【中学生の部】

「思いやり」 神戸市立烏帽子中学校 1年 松田 陽和…………… 25

今まで知らなかった世界 神戸市立太山寺中学校 2年 高森 琴音…………… 25

「二度目の温かい手」 神戸国際中学校 2年 長富 日々…………… 26

ワークキャンプを終えて 神戸市立鷹匠中学校 3年 朝日菜の葉…………… 27

【高校生の部】

ありがとう 神戸市立神港橘高等学校 1年 西田 知愛…………… 28

コミュニケーションの大切さ 神戸市立神港橘高等学校 1年 島 彩那…………… 29

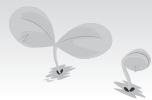
涙のありがとう 神戸野田高等学校 1年 志賀 茉幌…………… 30

ワークキャンプで学んだこと 神戸国際高等学校 1年 堀見さくら…………… 31

最優秀賞作品

中学生の部

寄り添うということ



神戸市立有野中学校

3年 坂本優生奈

「子どもたち一人一人に寄り添ってあげるのが、保育士の仕事なんです。」

ワークキャンプ最終日に言われたこの言葉が、私の心に大きく響いた。

私は、中学二年で行われた職場体験で、幼稚園に行かせていただいてからずっと、保育関係の仕事に興味を抱いていた。保育士さんの仕事を学ぶため、私はワークキャンプ三期全て参加し、全て認定こども園に行かせていただいた。すると、職場体験の時は気づけなかったことにたくさん気づくことができた。

ワークキャンプ第一期の二日目、私は年齢ごとに、お部屋に置いてあるおもちゃや物が全然違うことに気づいた。一日目に担当させていただいたクラスとは、年齢が一つしか変わらないが、活動内容なども全然違い、驚いた。子どもたちと過ごしていたらその理由に気づいた。子どもたちは、年齢によって、できることやできないことが、全然違うのだ。だから、年齢によって活動の内容や目的の難易度を変えて、子どもたちの成長に寄り添っているのだと気づいた。そう思えば、一つのクラスの中でもできることやできないことが一人一人少しずつ違う。例えば、もうお箸を使って一人で食事をするができる子もいるし、まだ一人で上手く食事をするのが苦手な子もいる。そんな一人一人の特徴に合わせた声かけや、サポートをする保育士さんを見て、私はすごいと素直に思った。

お昼休けいをとらせていただいている時、三才児クラスの担当をしている保育士さんが五才児クラスの一人の園児について話していた。担当していないクラスなのに、その子の特徴などについて

もはっきり覚えており、子どもたちが気づかない所でも、子どもたち一人一人にしっかりと向き合い、寄り添うために努力しておられることに気づき、私は驚いた。

この日から、私は保育士さんがどのように子どもたちに寄り添っているのかに着目し、ワークキャンプに参加した。そうすると、たくさんのことに気づくことができた。活動を苦手とする子に声をかけ、その子と一緒に活動を行ったり、けんかになった子たちのそれぞれの意見を聞き、まずはそれに共感し、肯定してから、どうすればいいかを考えさせたり、解決策を提案したりする。このようなことを毎日当たり前のように行っている保育士さんに、私は驚いたと同時に今の私にはできないなと思った。

人に寄り添うことは、簡単そうに見えて難しい。相手の特徴を理解して、サポートしたり、気持ちに共感したりする。簡単そうに思えるかもしれない。しかし、これをうまく実践するには思った以上の努力と工夫が必要なのだ気づいた。

ワークキャンプ最終日のお昼寝の時間が終わった時に、まだ眠くて泣いてしまった子がいた。私は、その子の隣にしゃがんで、背中をさすり続けると同時に、

「まだお昼寝したかったよね。落ちついたらおやつ食べに行こうか。」

と声をかけ続けた。保育士さんとやり方は少し違うが、今回のワークキャンプで私が学んだ中で今の私ができる最大の寄り添い方だった。しばらくすると、その子は落ち着き、笑顔でおやつを食べに行った。これを見て私は、少しは寄り添えたのかなと、少しだけ達成感を味わうことができた。

成長に寄り添い、一人一人の特徴に寄り添いながら、一人一人の気持ちに寄り添う。このような寄り添いは一人一人に必要なものであるが、それを誰かに実践するのはとても難しいもの。それでも私は、これからも経験を重ねながら、一人一人にうまく寄り添えるような人になっていきたい。

最優秀賞作品

高校生の部

「知る」



神戸市立六甲アイランド高等学校

3年 高田 莉愛

「知る」ということがどれだけ大切ことなのか、3日間で深く実感した。

私がワークキャンプに参加した理由は、高校で介護や社会福祉・コミュニケーション技術など様々な福祉科目を履修してきたうえで、実際に授業で得た学びを実践し、自信に繋がりたいと考えたからである。

私は体験学習を経て、自分自身の知識の浅はかさを身にしみて感じた。今まで幼児・高齢者・障がい者・成人と大きなまとまりで捉えて授業を受けていた自分がいた。しかし、三日間で計二十名の方々と関わり合うことで、認知症にも様々な種類があると知った。例えば、楽しくお話は出来るが何度も同じことを聞かれる方、意思疎通が難しく食の介助が必要な方、一つのことが心配で帰ろうとされる方など十人十色だった。私が「高校生です。」と自己紹介をしてもすぐ忘れてしまうため、初めは「誰だろう」という目で見られてしまったが、時間とともに「どこの高校なの?」「偉いね」など私の存在を覚えて下さったことが分かるお言葉をかけてもらえて、とても嬉しかった。

お話をたくさんする中である女性の言葉に心動かされた。それは「今のお年寄りには元気で頑固だから大丈夫。任せといて。」という言葉だ。私は勝手に「高齢者は弱者」と偏見に縛られ決めつけてしまっていたのだと気づかされた。百歳の方でも、自分で歩き元気に過ごしていらっしゃる。歳だから弱者になるという考え方は間違っている。そう学んだからこそ、全てを介助するのではなく出来ることはあえて任せることの大切さをより理解した。今回体験学習をさせていただいた施設は、洗濯やお皿洗いを進んでして下さるゲスト様がおり

「任せて、任せて」と元気にされていた。その方は認知症でここに来ていると自覚されておらず、自身をボランティアさんだと思っていた。そのような環境だからとてもいきいきされていた。しかし、一日目を終えてスタッフの方との会話の際に、私は現実を知った。施設でとても明るくされている方も家では夜中に飛び出したり、家族に暴行したりと想像がつかないほど凄絶な状況があり、介助者側が「知ろう」としないと知り得ないことが数多くあると学んだ。一人ひとりを「知る」ことでどんな人なのか、何が好きなのかなどが分かり、その努力が身体面だけではなく心から寄り添うことのできる力に繋がるのではないかと考えた。これらのことを一日目に学び、二日目、三日目は相手が話したいことを話してもらい、困りごととはできるだけ解決し安心感を与える行動を心がけて過ごした。その結果、相手から話しかけてもらえたり頼ってもらえたりできて自信に繋がった。

またこの三日間で、高齢者が集まる場所、支援する場所は必ず必要だと改めて実感した。ある女性が「死にたい、殺して」と冗談交じりに叫んでいるのに対し周りの方々が「生きてくても生きれない人がいるんやから、そんなんゆったらあかん」と言い、叫んでいた女性はそれを聞いて「生きてい、生きてい！」と笑いながら言っていた。互いに本心なのかは分からないが、家や高齢者住宅で一人でいると辛くて死にたいと思うのかもしれない。しかし、人と関わり合うことで当人の口から「生きてい」という言葉が出ていた。その様子を見て自然と心が温かくなり、私たちが手を差し伸べるのも必要だが高齢者同士が互いに手を差し伸べ合える環境があることが一番大切だと考えた。また、実際に悪い所はないのに、ずっと寝ているせいで身体が弱ってしまうことが高齢者には多々あると学んだ。しんどそうな人のお迎えは特に心が痛く、寝かせたままにしてあげたかったがその行為が返って老化に繋がってしまう。複雑な心境で行う大変な仕事だった。

私が一番知らなかったことは支える・助けるだけではなく「見送る」があることだ。今まで授業の中で身体的・精神的など様々な角度からの支援を学んだつもりだった。しかし支えの後には別れがあり、その時の家族の方の支援までが私たちのできる最大限のことだと知った。「してあげれば良かった」と後悔で終わらないよう一回一回の支援を一人ひとりに尽くすことが大切と学んだ。

このように私は三日間の貴重な非日常体験の中で、沢山のことを「知り」一人ひとりに心から寄り添うには一人ひとりを「知る」必要があると学んだ。また、出会いがあれば別れがある。私たちの生活では当たり前のようなことだが、認知症の方々にとっては、毎日が出会いと別れなのではないかと考えた。「こんにちは」「さようなら」何気ない言葉の重みを実感することができた。この三日間で学んだ「知る」ことの大切さを今後に生かしたい。

優秀賞作品

中学生の部

一人一人によりそって



神戸市立本山南中学校

1年 藤村 茉穂

「おねえちゃん先生、遊ば！」

ワークキャンプの一日目の朝、不安を抱えた私が教室のドアを開けると一人の男の子が声をかけてくれた。その言葉のおかげで私の不安は一瞬のうちに吹き飛んでいった。私が不安になっていたら子ども達に迷わががかかってしまうと思い自分がだせる一番元気な声であいさつをした。

一日目は、外がすごく暑く部屋の中で氷やかんでん、ねんどを使って遊んだ。こんなに暑い日でも子ども達が健康に遊べるよう工夫されていることを知った。それだけでは、ない。私が子ども達をながめていたら保育士の方が子ども達が遊んで

いる間も床のぬれている所をふいていることに気づいた。床がぬれていたら子ども達がすべて転んでしまうと配慮されていたのだ。私は子ども達ばかりをみていて床なんて全然気にしていなく、子ども達も遊ぶことに夢中になっていたためとても危険な状態だった。私は子ども達の危険を配慮して行動しているつもりだったが自分の感覚でしか捉えられていなかった。子ども達を自分の視点で見るのではなく子ども達一人一人によりそった視点で見るのが大切なのだ。それから一日目が終わるまでの間、私は姿勢を低くし子ども達と視点をあわせて過ごした。すると私が今まで見ていた景色と全然違って危険なものがたくさんあった。床に散らばった小さなブロック、角のものがたまたなど今まで気づかなかったものばかりだ。だから私は、今までよりも注意を払って気を引きしめた。

ワークキャンプ二日目、私は昨日の反省を生かして子ども達によりそって接した。一日目よりも仕事に慣れた私に保育士の方が仕事をくださった。子ども達が描いた絵を切り取る仕事だ。私にとって簡単だが量が多く楽ではなかった。切り取っているうちにみんなが一生けん命に描いたことがどんどん伝わってきておもわずほほ笑んでしまった。最初は楽だと思っていた仕事も楽に思ってしまうくらい。一人一人の思いがこもっていた。

私が休けいをとった時保育士の方をみていたらだれ一人として苦しそうな顔をせずそれどころか皆笑顔だった。昼食も子ども達が寝てから、時間も短く仕事も私の何倍も多く大変だ。なのに皆笑顔だった。それを見ていたら今までの自分が恥ずかしく思えてきた。そうだ、私達は子ども達の笑顔を預かっている。そんな私が苦しそうな顔をしていたら意味がない。このことをきっかけに私はどんな時も笑顔でいることを心がけた。

ワークキャンプ最終日、子ども達が「おねえちゃん先生、ありがとう」と言って手をつないで

くれた。今までにも言われてきたがこんなに感動したのは初めてだ。つないだ手が小さく温かった。自分もこんなに小さかったのだと成長を実感した。

このワークキャンプを通じて私は、最初のころに比べて成長できたと思う。私は子ども達の笑顔を預かっているのだからどんなときでも笑顔で一人一人によりそった視点をして危険から子ども達を守ることが大切なのだと分かった。今回学んだことは、これからの生活でも重要になってくる。だから今回学んだことを自分のものにしてさらに成長できるように頑張っていきたい。

優秀賞作品

中学生の部

誰もが楽しく暮らすために

神戸国際中学校

3年 黒岩さらさ

私はこの夏、福祉体験学習で障害者施設に行きました。なぜこの施設を選んだかという、私は普段、障害者の方と接する機会がないため、重度の知的障害がある障害者施設の利用者さんたちと過ごさせて頂きました。

私は、3歳から6歳まで、里山保育園で育ち、そこでは足の不自由な子やダウン症、自閉症などの障害がある子と一緒に過ごし、どんな小さい子どもでも「自分ができることは自分です」「誰かが困っていたら助ける」ということが当たり前で、自分勝手な行動をする子がいたら、先生がみんなを呼び、何がいけなかったのか。こんな時はまず、何をしたら良かったのか。ということをみんなで話し合い、先生も子どもたちも家族のような存在で、人を想いやる大切さを知りました。

私は幼い頃から、歌うことが大好きで、介護施設でボランティアをしており、私の歌う演歌や歌謡曲を聞いて下さる方々が、涙を流して喜んで下

さり、私もその時、すごく嬉しく、幸せな気持ちになり、逆にみなさんから元気を頂いています。

ボランティアをはじめから、福祉関係のお仕事に興味を持ち、仕事だけでなく、プライベートでも私に関わって下さる周りの人たちを笑顔にできるような存在になりたいと思うようになりました。

今回、知的障害のある方と過ごし、初めてお会いした時は、突然走ってこられたり、叫ばれたり、たたかれたりして、すごくびっくりして、言葉でコミュニケーションをとることは難しく、どうしていいのかわからなかったのですが、職員さんの対応をみると、私たちの言っていることは理解して下さる方もいて、自分の気持ちを表情や動作で伝えようとしてくれ、言葉以外でもコミュニケーションのツールはあるんだということが分かりました。表現の仕方が違うだけでそれは、その人の「個性」なのだと気付かせて頂きました。

私たちは、健常者と障害者を分けて考えるのではなく、誰しも人それぞれの「個性」があってその「個性」を理解し、受け入れて、相手の気持ちに寄り添い、接することがとても大切だと思います。

そして、職員さんが利用者さんに対してとても優しく接している姿を見て、大切な命をお預かりする仕事の重大さを知ることができました。

私もそんな風になれるように今、自分ができる目の前のことを一生懸命頑張りたいと思いました。

最後に私は心から思うことがあります。それは、障害者さんに対しての理解がより深まって差別がなくなり、ご本人やご家族が住みやすい世の中になってほしいです。

優秀賞作品

高校生の部

ワークキャンプを終えて



兵庫県立須磨友が丘高等学校

2年 土方 音愛

私はワークキャンプを通してよりよい介護とは何かと考えさせられました。ワークキャンプの参加の理由は些細な好奇心からでしたが、こんなにも自分の視点が変わるなんて思いもしませんでした。今回訪問させていただいた施設では通いを中心に随時の訪問や泊りを組み合わせて提供するサービスを一体化して運営されています。利用者の方も25人と小規模で色々な形で利用されていました。体験前に代表の方から利用者の方とコミュニケーションをする上での大切なことを教えていただきました。大半の方が認知症で同じことを話したり、言ったことを忘れてしまうけれど利用者の方にとっては全てが初めてのことであって私もフレッシュに対応することが大切だと教えていただきました。

初日は主に施設の雰囲気を知ることでしたが新しいことに気づかされたり、コミュニケーションにとっても苦労した一日でした。最初は職員の方全員で利用者の方の報告をする申し送りでした。前日の夜勤の方がまとめた申し送りには利用者の方の変化や家族のお願いや報告が記載されていてその細かさに驚いたのと同時に小さな変化を見落とすことが命に関わるのだなと感じました。利用者の方とのコミュニケーションではあまり話されない方と話すとき、探りながら踏み込んでいいラインを見極めようとするも質問攻めになってしまい苦労しました。

二日目では利用者の方も一緒に昼食を作りました。食材を提供してくださったボランティアの方とも楽しくお話ししながら野菜を切ったり、おにぎりを作ったりしました。昼食作りに限らず利用者の方が自主的に洗いものをしたり洗濯物を畳ん

だりしており、介護は生活のサポートだけではなくできることはしてもらう、その人の自立を維持することも介護なのだと思いの中の介護の認識が変わりました。

午後からは特別に訪問介護に同伴させていただきました。主に血圧を測ったり、冷蔵庫の食材の確認、薬を飲んでいるか、今の季節だとクーラーがきちんとついているかなどを確認するために訪問するそうです。あたしが今回訪問した方は認知症の一人暮らしの女性で施設は週に数回利用されている方で、始終楽しそうに学生時代の部活の話をしてくれました。私が帰る際には名残惜しそうに「もう一人のお母さんやと思っていつでもきていいからね。いつも一人やからすることがないよ。」と言ってきて、あったかい気持ちと苦しい気持ちになりました。訪問介護では一人暮らしの人にとって人と関わる機会でもあって大きな心の支えになっているのだと気づくことができました。

最終日には利用者の方の名前を全員覚えることができ積極的に話することができました。施設では利用者の方のしたいことを一緒に叶えたりしているそうで、それをもとに興味の話などして利用者の方と距離を縮めることができました。また利用者の方にここはどうですかと聞いた際、色々な人がいるからいるだけで楽しい、楽しくない、家にいてもここにいてもすることがないから普通、など色々な意見がありました。施設には要支援1から要介護5までの方がいてそれぞれ活動範囲が異なる中で施設での生活を充実したものにするためにはどうしたらよいかと今も考えています。

私はこの三日間で介護の奥の深さを知ることができ、実際に目で見ることで以前の自分では考えなかったこと、これからの介護をどうしていいかといけないうのか。少しですが考えることができました。また介護なんてまだ先のことだと思わず、若い人たちがこそが介護を知っていく必要があると感じました。そのためにこの三日間で自分が学ん

だこと、感じたことを自分の中だけでしまっておくのではなく身近な人たちに伝えていけたらなと思います。

優秀賞作品

高校生の部

「人を支える」ということ



神戸常盤女子高等学校

3年 行天 綾那

私は、今年度のワークキャンプで介護福祉施設で活動しました。今回私がお世話になった施設は、要支援1の方から入居ができる「ケアハウス」と、要介護3以上の方から入居できる「特養」の2つの機能を併せ持つ施設でした。要支援・要介護、ケアハウス・特養では具体的にどんな違いがあるのだろう、と疑問を抱いていましたが、実際に活動をしていくなかでその違いは入居者様だけでなく、設備や室内のデザイン、食事の内容や一日の過ごし方、といったところまで多岐にわたっていることを知りました。特養で過ごす入居者様より比較的元気な方々の多いケアハウスでは、まるで自宅かのようにお部屋にたくさんの私物を飾っておられる方々が多く見受けられたことや、共用スペースに用いられているインテリアや装飾にも明るい色味のものが多かったこと、また、食事を自室でとられる方々もいたことなどから、入居者様がそこで“生活している”のだということを強く感じ取ることができました。

特養とケアハウスでは、さまざまな違いがあることを知りましたが、その根幹にあるのは両方も「生活の場」であるということです。施設で生活する入居者の方が、そしてその生活を支える職員の方が、双方の存在により支え、支えられての関係が成立していることを実感しました。私がこの3日間での活動を通して得られた大きな体験は、こうした“互いの存在が支えとなっている”

と感じる方々のお声を伺えたことです。入居者の方々は、職員の方々に「日頃から親身になって色々なことをしてくれる」と感謝の気持ちを話したり、「ありがとう」と直接声をかける方々がたくさんいたことが強く印象に残っています。また、職員の方々は入居者の方々に対して「元気な姿を見ると嬉しい」「ありがとうと言ってもらう度に力が湧く」などと入居者様の存在が支えとなっていることを話される姿が強く印象に残りました。こうした体験から、施設で過ごす皆様のみ周りには愛で溢れたとても温かい空間が広がっていることを感じました。また、そうした日々を過ごすなかで育まれた信頼感が入居者様と職員の皆様をつなぎ、一人ひとりの明日へとつながっているのだと、3日間の活動を通じて学ぶことができました。

入居者様の生活を支えているのは介護士の皆様だけでなく、施設で働く大勢の職員の方々も入居者様の生活と密に関わっているということを実感しました。

看護師免許を持つ職員の方々がお仕事をされる医務室では、入居者様全員の薬や点滴、健康の状態に関するさまざまなことを管理・指導されており、皆様の生活を最前線で守る責任と信頼を胸に働く方々の姿を間近で見えて勉強することができました。

管理栄養士の方々からは、入居者様が実際に飲食されているものをご紹介いただいたり、福祉の現場における栄養の意義や介護の現場での体重測定の仕方を教えていただいたことで、“栄養”と“健康”がいかに介護と密に関わっているかを知ることができました。

このように、それぞれの職種、専門性を持った方々が協働し、繋がることで入居者様の生活に安心をお届けできるということが介護施設の最大の強みなのではないかと感じました。

しかしながら、こうしたサービスを受けられず家庭での介護に悩む人々がまだまだたくさんいる、という現状についてもお話しくださいました。

近年では少子高齢化の影響もあり、介護を必要とする人々が増加している反面、さまざまな事情から地域福祉のサービスを受けられない人々がいるのも確かです。そうした人々が少しでも多く救われるには、地域と繋がれるということが重要だと仰っていました。誰かと手を取り合い、助け合うことで今より少し明るい未来が見えてくることを、現場で出会ったすべての皆様が願っておられました。この願いをより多くの人々の生活にとって身近なものにするためには、私たちのような若い世代が現場での体験を経て感じたことや気づきを伝えていくことがとても大切だと感じています。今回初めて体験した介護の現場で出会ったたくさんの人の声や思い、自分自身が感じた気づきを忘れることなく、“伝える”ことで、ここで出会った学びを明日につなげていきたいです。

最後に、3日間の活動を経て想像以上の多くの発見があったことや、現場で出会った、たくさんの方々から色々なことを学び、吸収できたことは私にとってかけがえのない財産となりました。どうしてもマイナスなイメージが先行しがちの介護という現場でこれほどの素敵な出会いを体験でき、思い出を作れたことは間違いなくこの3日間における最大の気づきであると感じています。

優良賞作品

中学生の部

ワークキャンプで得た宝物

甲南女子中学校

1年 葛原悠莉奈

私がワークキャンプに参加した理由は、人と関わるのが苦手で、そのヒントを得たかったからです。

私が担当したのは、こども園の五才児クラスでした。その子供たちがいる部屋に入ると「お姉ちゃん先生！」と元気いっぱい、屈託のない笑顔で、

私を迎えてくれました。その言葉を聞いて、私は、緊張が一瞬で吹っ飛びました。このまま、楽しく遊んで、一日が終わっていくと思いました。しかし、すぐにそれが間違ったイメージだということに気が付きました。

一日のルーティーンを進めていくためには、大変な仕事をこなしていく保育士さんの支えがあることに気が付きました。例えば、お昼寝をする前に、たくさんの子供たちの寝具を運んでいく力仕事。眠れない子供たちの話し相手をして、安全や安心を守ること。また、昼食やおやつ時間に、自分が食べている途中で、子供たちのおかわりの対応をしていたことです。

そして、何より、たくさんの子供たちとの関わりの中で、園児たちの要望を、うまくさばきながら、素早く優先順位をつけて、子供たちに理解できる言葉で伝えることができていたことです。

私は、今まで、人のために仕事をやったことがなくて、いつも、生活の中心は、自分だけでした。コミュニケーションにおいても、そうだったのではないかと感じました。例えば、ワークキャンプの中で、自分だけが分かっている言葉で話してしまい、園児がキョトンとしていたことがありました。そんなことが起こってしまった原因は、自分の語いのなさや相手の立場に立ったコミュニケーションという視点が足りなかったことにあるのではないかと気づくことができました。

保育士さんたちは、常に子供たちの立場によりそった言葉の選び方で、大きな声で、はっきりと伝えていました。また、子供たちの話を、よく聞いてあげる姿勢も持っていました。

実は、私の担当クラスの担任の保育士さんも、私と同じように、人と関わるのが苦手でした。その保育士さんは、子供たちの目線に立って、毎日、試行錯誤をしていきながら、努力をしているのだと教えてくれました。

この三日間で、私は、今までの自分には、大切な視点が足りなかったということに気づくことが

できました。それは、コミュニケーションの基本は、相手がいるということです。例えば、相手が理解できる言葉選びや相手の立場に立った思いやりを持つことです。当たり前のように、実は、それらが難しいものだというところにも気づきました。

これからは、学校や家での生活、社会に出たあとも、このワークキャンプでの経験を生かして、人の立場を思いやれる自分になりたいと思います。

優良賞作品

中学生の部

保育士を体験して



神戸市立有馬中学校

2年 三島 千和

私は、ワークキャンプで保育士の仕事を体験しました。この3日間で私は色々なことを学びました。

まず、年齢による関わり方の違いです。私は2歳児、3歳児、5歳児のクラスを担当しましたが2歳児はおもちゃを口に入れたり、まだ話し方が慣れていない、舌が回っていないなど、まだ赤ちゃんの時のものが残っていました。3歳児は、舌が回っていない時はあるけれど、おもちゃを口に入れることは無く、折り紙やぬりえなど、新しいことや遊びをしていました。さらに2つ離れた5歳児は、ぬりえや折り紙の完成度が高く、歌を歌う時も音がはずれていなかったり、頭を使うゲームをしていたりと、遊びの楽しさも増していました。それに加え、言葉も少し乱暴になっていました。

私は、この事から、年齢関係なく接してしまうと、言葉が分からなかったり、逆に分かりすぎて嫌な気持ちにさせてしまうことがあるという事、それぞれの子ども達に合わせた関わりが出来るようになる事が大切だということを学ぶことが出来

ました。

次に、一点に集中せずに、周り全体、クラス全体を見ながら行動することです。特に2歳児は、物を口に入れたり、そこらじゅうで物が転がっているの、いつも周りに気を配っていないといけませんでした。他のクラスでも、遊びに誘ってくれるけれど、その他の子ども達の様子や、一緒に遊んでいる子ども達がけんかしていないか、けがはしていないかなど、安全のために時々周りを見る必要がありました。一緒に遊んでいる子ども達に集中したいけれど、周りも見なければならぬのは、とても大変でした。先生方は、一緒に遊んでいる子ども達とも遊ぶけれど、時々クラス全体を見て、それで確認をしておられました。

この事から、一緒に遊んでいる時も、そうでない時も、クラス全体、周りを見る事は事故などを防ぐことにもつながる、とても大切な行動なんだと知り、学ぶことが出来ました。

最後に、保育士は子どもの命を守りながら個々の成長を見守り、より良い成長をつなげていく仕事だということです。私は、保育士の事を「子どもを育てる仕事」という風に思っていました。けれど、今回のワークキャンプを通して感じ方が変わりました。保育士の方々は、子ども達が困っていたら、教えるだけでなく、「それ、〇〇ちゃん知っているよ。きいてみたら?」という風に周りの子達との関りを深めようとしていました。他にも、先生が教えず、自分で気付いてもらう、子ども達に楽しみながら学んでもらうように誘っていました。

私は、この事から、保育士はただただ親のかわりに子どもを育てる仕事ではなく、子どもを見守るのはもちろん、学習面でも体の面でも親の代わりに教える環境を与え、支える、子どもが成長する上でとても大切な職業だという事を実感しました。

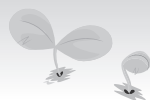
私は、ワークキャンプの3日間で、保育士の仕事の意味や役割、仕事内容を詳しく知ることが出来ました。本当の福祉は、子どもから高齢者ま

で、みんなが幸せに過ごすことのできる環境をつくり、一人一人の意見や生き方を大切にすることだと感じる事が出来ました。世界に「福祉」が行き渡るように、身近な所から一人ひとりの違いを分かち合い、意見や生き方を、尊重していこうと思います。

優良賞作品

中学生の部

秘密のコミュニケーション



神戸国際中学校

2年 中島 楓花

「いつも同じ席に座りたい人がいます。」ヘルプマークを付けた女性の絵と一緒にかけられたポスターを地下鉄で見たとき、私の足は止まった。そんな人がいるということに私は驚きを隠せなかった。

ある日学校でワークキャンプでの手紙がくばられた時、その手紙に夢中になりすぎて先生の声が遠く感じた。「やってみたい！」私は瞬時にそう思った。そう思った自分が意外だった。行く先をなやんだ時、あのポスターの事を思い出して、迷いなく障がい者施設に行くことに決めた。

施設に行く初日、母に送ってもらう車の中で急に不安な気持ちでいっぱいになった。「どんな人がいるんだろう。」「どんな接し方をしたら良いんだろう。」考えれば考えるほど行きたくなくなった。不安になりながら施設の中へ入ると、「こんにちは！」と利用者の方が元気良くあいさつをして下さった。お手伝いをしに来たはずの私が逆にパワーをもらって、私の不安はいつの間にかどこかに消えていった。

施設には利用者さんが過ごしやすいアイデアがたくさんあった。たとえば自分の力で文字を理解することが難しい利用者さんのために、お昼ご飯のこんだてを文字だけでなく写真で表したり、利用者さんがどこかへ行かないようにエレベーター

のボタンにロックがかかっていたりした。その日の帰り道、今までは気にせず踏んでいた点字ブロックをよけて歩いている自分がいた。

二日目の朝、利用者さんのことをちょっとわかった気でいた私はまだまだ甘かった。突然あく手を求められたり、走りまわっている人を見て、一日目に消えていた不安がまた、よみがえってきた。だからこそ、もっと利用者さんとお話をして、コミュニケーションをとりたと思った。

「〇〇さんはおしゃべりが好きなんですよ。」と言われたが、しゃべるのが早すぎて私には聞きとれなかった。それでもコミュニケーションを取ると決めた私は会話を続けた。すると彼は別人のような笑顔で「もっとお話ししよう。」と言ってくれた。その時初めて彼と通じ合えた気がした。

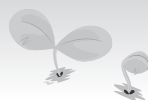
最終日、アルミかんをつぶす班でペアになった彼の声をその日一度も聞くことはなかった。言葉でしかコミュニケーションをとれないと思っていた私は、昨日施設の方がジェスチャーで会話しているのを思い出して彼に親指を立てて見せた。すると彼は満面の笑みで同じポーズを返してくれた。普段人と接するなかで初めてこんなにうれしい気持ちになった。文字や言葉だけがコミュニケーションではないことを彼から学んだ。

これは、彼と私だけの秘密のコミュニケーションだ。

優良賞作品

高校生の部

「ありがとう」この一言で



甲南女子高等学校

1年 光田 圭那

「ありがとう」

この三日間数えきれないほど私を救ってくれた言葉だ。

私は今回特別養護老人ホームのデイサービスセ

ンターに行った。ワークキャンプ初日、緊張と不安で胸がいっぱいの中、施設に入ると職員の方々が笑顔で迎え入れてくださった。私がまず初めに行ったのはデイサービスに来る利用者さんに飲み物をお出しする仕事だ。しかしその仕事は利用者さん一人一人を理解していないと出来ない仕事だった。飲み物を出すと言っても温かいお茶や冷たいお茶、ジュース、牛乳があり、持ちやすいのが湯呑なのか、コップなのか、利用者さんによって違っているのだ。そのため私には判断がつかず、看護師の方に教えてもらいながら行った。飲み物を入れるという簡単な仕事だが、利用者さんを理解する必要があるのだと実感した。

二日目、私にとって少しトラウマになった出来事があった。

ある利用者さんがお茶をこぼしてしまったそうで、その方の服をドライヤーで乾かして欲しいと頼まれた。その利用者さんは話すことが難しい方だった。服を乾かしている時、私に話しかけてきた。しかし私はなんて言っているか全くわからず、一旦乾かすのをやめ、何度か聞き返したが聞き取ることが出来なかった。ドライヤーをされるのが嫌だったのかなと感じ、職員の方にこれで良かったのか尋ねたところ大丈夫だと言われ、そのまま職員の方にお任せした。その時私は罪悪感と責任感を感じた。この時からこの利用者さんに近づくのを恐れてしまうようになった。

お昼ごはんの時間、私は食事運びをお手伝いした。食事を見ていると、中には食べやすいように食材を細かく切ってあるものや、ご飯がお粥に変更されているものがあり、利用者さんそれぞれに合わせて工夫されているのだと知った。私は食事を運び終え、休憩に入った。その間、職員の方々の様子を見てみると、介護士の方がつきっきりで食事を手伝っていたり、看護師の方が利用者さんを見て回ったりする姿が見受けられた。また、職員の方々が食事をとり終えるとすぐに利用者さんの元に戻り、仕事を再開していた。その姿を見て

尊敬の念を抱いた。それと同時に、利用者さんが安心して過ごせている裏にはこれだけの努力と思いやりがあるのだと感じた。

最終日、午後からはこれまでと同じカレンダー作りのお手伝いをした。私は利用者さんと話をしながら、紙を切る作業のお手伝いをした。二日目に職員の方から「話しかけることはもちろん必要だが、ご利用者の言葉に耳を傾け、聞き上手になってあげるといい」とアドバイスを受け、相手が話しやすいよう、目線を合わせることを意識してみると、利用者さんは嬉しそうに家族のことなどたくさんお話をして下さった。私は紙を切り終え、その方に見せてみると、とても喜んで下さり、何度も「ありがとう」と声を掛けて頂いた。私が全部切ってあげるのではなく、切りやすい所は利用者さんに切って貰うことを意識したことで、利用者さん自身も達成感を得ることができ、私も喜びとやりがいを感じた。

その後おやつ時間があり、私はテーブルを拭き、利用者さんの手を消毒する作業を頼まれた。この日、二日目に私が服を乾かした方がいらっちゃった。私は少し恐怖心を抱いた。消毒させてくれないんじゃないか、私を嫌がるのでは、と考えつつも、その方の元に行った。するとすぐに手のひらを向けて下さった。消毒をすると私を見てはっきり「ありがとう」と。私は今までにない喜びと安心感でいっぱいになったが、それと同時に今まで恐れていた自分にとっても腹が立った。何事も逃げていたら成長なんてできない。大切なのは相手を思い、行動することだと気付かされた一日だった。

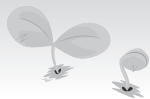
毎日利用者さんが入れ替わり、名前も顔も分からず、緊張と不安でいっぱいだった私を救ってくれたのは「ありがとう」のたった五文字。この五文字にどれほどの力があるのか、人を勇気づけるか、数えきれないほどこの言葉をかけて頂いて知ることができた。利用者さんの中には言葉を口にするのが難しい方もいる。私はその人の気持ちも

分からず、勝手に恐れてしまった。しかし、今回のこのことに気づけたことで大切なことを学ぶことが出来た。また、一日中利用者さんのために尽くし、努力し続けている職員の姿をすぐそばで見て、実際に体験したことで、この仕事には他では味わえないほどやりがいがあること、人と人とのきずなを感じられる素晴らしい仕事であることを身をもって実感することが出来た。この三日間を通して学んだことを活かし、「ありがとう」この言葉を忘れず、これからも成長し続けたいと思う。

優良賞作品

高校生の部

対話の奥深さ



神戸海星女子学院高等学校

1年 金子亜耶伽

「対話」。それは生まれてから十六年間、たくさんの人々と数えきれない程交わしてきたものです。しかし、今回のワークキャンプを通して自分では一人前だと思っていた対話がまだまだであったことに気付かされ、対話の奥深さを魅せられました。

対話とは、対等な立場で向き合って話すことです。今回、私は保育園で活動し三・四歳児のいる、らっこ組を担当させて頂きました。初日、私が自己紹介をする前から、緊張しながらも積極的にやって来てくれる子がいてとても嬉しく感じたと同時に、私自身の緊張も解けてきました。そんな中、「キークツ!」「パーンチツ!」ある一人の元気な男の子が、突然私にキックやパンチをしてきました。本当はそれらはやってはいけないことなので、私はその子の為に注意しなければなりません。けれども私は、注意して嫌われてしまったらどうしよう、注意すると泣いてしまうかもしれない、そして、自分より十三歳下の子なのだから大目に見よう、という思いから何も言

えずにただ笑っていることしか出来ませんでした。しかし、保育士の方はその男の子に「お姉ちゃんにそんなことしたらダメでしょ?お姉ちゃんは痛がっているよ。ちゃんと謝りなさい。」と言われていたのです。すると、その子も素直に謝ってくれました。この時、自分は対話に関して未熟である、ということを感じ知らされました。振り返ると、私は自分の事ばかりあれこれ考えて、その子の事を何も考えられていなかったのです。ですが、保育士の方は、次その子が他の子に同じことをしないように、また、キックやパンチをされた相手の気持ちをその子自身に理解させる為に注意していたのです。

また、ある時には、一人の女の子がプール遊びで使用したタオルの入ったカゴをプールから、らっこ組のお部屋まで運んでいました。自ら進んで先生のお手伝いをしたことに対し、先生は「助かるよ、ありがとう。」と声を掛けていました。なぜ先生はその子に「偉いね。」と褒めることはしなかったのか、私は不思議に思いました。しかし、相手が友人だったらどうでしょう。その場合、「偉いね。」と褒めることはせず、感謝の気持ちを伝えると思います。つまり、「褒める」という行為は子ども達と対等な立場で接するには無用の長物であったのです。このことに気が付いた時、細かなところまで子ども達を思いやる保育士の方の偉大さを実感し、対話の奥深さから人の温かさや心のつながりを感じ取ることができました。

それに加えて、私が長年抱いていた疑問が解消されました。私自身が通っていた保育園には特別な決まりがありました。それは、先生のことを「〇〇先生」と呼ばずに「〇〇さん」と呼ぶこと、そして、たとえ友人同士であったとしても呼び捨てをしてはいけない、というものでした。当時の私には、何の為にそのような決まりがあるのか分からず、時々友人のことを呼び捨てで呼んでしまい注意されていたことを覚えています。どうしてこのようなことをする必要のあるのか、と今まで

ずっと思い続けてきました。しかし、今回のワークキャンプの中でその答えを見出すことができました。それは優劣上下がない対等な立場で、一人の人間としてお互いを大切に思うことを学ばせようとしてくれていたからだったのです。

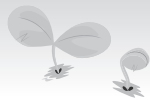
今回、初めてワークキャンプに参加し、子ども達のたくさんの笑顔に癒され元気をもらいました。このような貴重な体験ができたことをありがたく思い、学んだことをたくさんの人と共有し、成長していきたいです。最後に、私のことを受け入れてくださった保育士の方々そしてらっこ組のみんなから多くのことを学ばせていただいたことに感謝します。

本当にありがとうございました。

優良賞作品

高校生の部

高齢者福祉施設で活動して



神戸国際高等学校

1年 菅 愛葉

近年、ロボットや様々な職業で効率化が求められています。コンビニエンスストアが無人販売になったり、作業効率を上げるために機械を多く使ったり、電車の運転が無人になったり。その中で、人間にしかできないと言われている職業の一つが福祉現場です。福祉事業は、なぜ人間にしかできないと言われているのでしょうか。

私は先日、高齢者施設での職業体験に参加させていただきました。この体験を通して、高齢者福祉施設とはどのような機能があるのか。また、利用者のかたとはどのように接しているのか。自分一人であることに不安を感じたまま、一日目を迎えました。施設内の印象は温かい雰囲気でした。また、職員の方もとても親切で、施設で何ができるのか、どういったサービスをしているのかと言う説明をしていただきました。一日目は、一緒に

レクリエーションに参加したり、認知症予防の脳トレを一緒に考えたりなど、利用者さんとの交流が主な活動でした。緊張でなかなか動けませんでした。利用者さんと話すうちにすこしずつリラックスできたと思います。

利用者さんの家へ送迎に行った際、管理者のかたが「認知症の症状のある人と言えば、認知症のところに目が行きがちだけど、そこに注目するんじゃないくて、相手は一人の人間であること。そして、人ってことは相手に敬意を持って接することは意識してやらないと駄目なんだよ」と仰っていました。そこで私は、自分も認知症という言葉のところに目が行っていたことに気が付きました。そして無意識に、自分と利用者さんの間で小さな壁があるような感覚を持っていたことに気づきそんな自分に驚きました。

認知症予防には、脳トレや軽い運動はもちろん、会話をするだけでも予防になるそうです。利用者さんから話しかけることもあります。職員さんから利用者さんに話しかけることが多いのはそういうことなのかもしれないと納得しました。

「利用者さんがいま何をしたいのか、どうしたら快適に過ごしてもらえるか、相手に寄り添うことが福祉の仕事では一番大切。」

これが、ワークキャンプの中で一番印象に残った言葉です。そしてこれが、福祉事業は人間にしかできないと言われている理由ではないでしょうか。

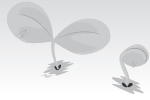
「相手に寄り添う」それは福祉の中で、一番大切なことだと思います。人の感情は複雑で簡単に予想できない部分も多くあります。ですがその中で工夫し、相手のことを理解しようと相手と向き合えることが人間の強みであると感じました。

この三日間は、学びが深まり、貴重な経験を得ることができました。今まで関わったことがない場所で活動して、自分の中の価値観が大きく変わった三日間だったと思います。また機会があればぜひ参加したいです。

佳作作品

中学生の部

「思いやり」



神戸市立烏帽子中学校

1年 松田 陽和

今回のワークキャンプで、私は思いやりという
ことの大切さに強く気づかされました。

私が担当させて頂いたクラスは、五才児クラス
で、ワークキャンプ初日、私がとても緊張してい
るのを見て、たくさんの子供達が、「どこから来
たの?」「何年生?」「一緒に遊ぼう!」と声をかけ
てくれました。みんな初めて会う私にけいこも
せず、むしろ、興味津々で話しかけてくれました。
その時、一人の女の子が突然、私に飛び乗ってき
ました。私自身おどろきはしましたが、「テンショ
ンが上がってしまったのかな?」と思い笑ってい
ました。ところが、その場を見ていた保育士の方
やまわりの子供達が、「今のはあぶなかったよ。」
と優しく声をかけたのです。それを見た私は、た
とえ自分は良くても、その子にとってはこれから
色々な人と過ごしていく上で、この状況を注意さ
れなかったら困ることになるのではないか、だか
ら保育士の方やまわりの子供達は、女の子に声
をかけたんだと考えました。

その後給食の時間になり、私もご飯を食べるサ
ポートをさせてもらいました。その中でご飯に
中々手をつけず、ボーっとしている男の子がい
ました。私は「ご飯食べれる?」などと声をかけた
のですが、やはり中々進みませんでした。そんな
時、保育士の方がご飯を小さく食べやすい大き
さにして食べさせました。すると男の子はどん
どんご飯が進み、なんと時間内に食べ終わった
のです!私は家に帰ってから、どうしてご飯が進
まなかったのか、そして、保育士の方にしても
うとご飯が進んだのはどうしてかを考えました。
よく考えると、私は男の子の意見を全く聞け
ていなかったことに気づきました。そして、私
からの声

かけではなく、男の子のお話をしっかり聞く
べきだったと反省しました。

このことから、子供になにかできないことが
あった時は、自分からお世話しようとするの
ではなく、まずは、相手からしっかり話を聞き、
相手のことを思うことが大切だと思いました。

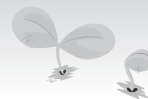
この出来事を通して、物理的にも心理的にも、
相手と同じ平等な目線にいること、相手のこと
を思って声をかけること、つまり、相手を気
づかい、思いやることが大切だということが
分かりました。

初めての保育体験だったのですが、三日間
とても楽しくて、たくさんの子供達から元
気と笑顔をもらいました。さらに、新たな考
え方や視点の発見もできて、とても実りの
ある時間でした。このようなきかいに出会
えたことに心から感謝します。

佳作作品

中学生の部

今まで知らなかった世界



神戸市立太山寺中学校

2年 高森 琴音

私は今回のワークキャンプを通して、今
まで知らなかった世界を知ることができ
ました。福祉という世界です。

私が今回ワークキャンプに参加した動機は、
将来の夢が無かったからです。周りの友
達は楽しそうに未来について話して
いました。そこにあせりを感じつつも、
これはチャンスなのでは、と思った
のです。今、全然知らない世界に飛
びこんで、視野を広げようと思いつ
きました。選んだのは、障がい者施
設と高齢者施設です。前に本を読
んだことがあり、ずっと気になっ
ていたからです。

私が行った障がい者施設は、知的ハン
ディをもつ人たちが通うところ
です。まず初めに、生活介

護の方へ行きました。それぞれ利用者さんが好きなことをしており、ある方がパズルを一緒にしよう、とさそってくれました。最初は色んな人に話しかけられておどろきましたが嬉しかったです。初対面でも友達のように接してくれて、私も思わず友達という気分になりました。学校などで人と接する時は、気を使いすぎて疲れることもありますが、ごく自然な空気だったので、とても居心地がよかったです。お互い笑顔だったからかもしれません。

次に、就労継続支援の方へ行きました。こちらではみんなが働いていて、その姿がとてもカッコ良かったです。行く前は障がい者に対する偏見も正直あったけど、働く姿を見ると全部吹き飛びました。印象に残っているのが、利用者さん一人一人の工夫です。例えば、数を数えるのが苦手な人のために仕切りのついた箱があったり、今までにやったことを分かりやすくするためのホワイトボードなどがありました。職員の方の言葉が、ずっと心に残っています。

「福祉では、してあげるんじゃないくて、自分で出来るようにすることが大事なんだよ」

と、いうものです。この言葉をきっかけに、「手伝う」と「手伝ってあげる」の違いに気づきました。できないことでも、できることを生かしてすること。とても大切なことですが、普段は気づけなかったことでした。だからこそ、利用者さん一人一人はとてもカッコよく見えるのだと、分かりました。

高齢者施設の方でも、職員の方の気づかいが多くありました。例えば昼食。人に合わせて少しずつ違うメニューになっており、工夫がすごいなと思いました。また高齢者の方は自分から飲み物を飲むことが少ないため、一人一人に渡しに行きました。種類も多く、お茶や水、お茶ゼリーというものもありました。誰がいつ、どのくらい飲んだかも記録してあり、大変そうだなと思いました。でも、職員の方たちはいつも楽しそうで、この仕事

にやりがいを持っていることも、たくさん伝わってきました。

二つの施設に行くと、福祉とは何かがよく分かりました。一人一人によりそい、サポートする。当たり前にも出来なくても、その人なりの工夫をしていく姿は、とてもまぶしくてカッコ良かったです。そしてこれは、日常生活においても同じことです。自分の前に壁が立ちだかかったときにどうするか、どう工夫して乗り越えるかを考え、自分の答えを出すことが大切なのです。これからの私は、様々な視点で物事を考え、社会にある偏見をなくしていきたいです。そして、人の役に立つことができる仕事をしたいと思いました。

佳作作品

中学生の部

「二度目の温かい手」



神戸国際中学校

2年 長富 日々

「ずっと、どうしてるか気になってたんや」
その人は私を見るなり駆け寄ってきてくれた。そして手を握ってくれた時、さっきまでの緊張感がうそのように消えた。

私は昨年引き続きワークキャンプに参加し、障害者施設を選んだ。するとなんと昨年と同じ施設に行くことになった。

学校で施設名を聞いた時は正直、昨年と同じ場所に行って感じることや、学ぶことはあるのだろうかと思ってしまう。

そしてワークキャンプが始まった。

昨年は、施設に入った時見たことのない光景に衝撃を受け体が固まってしまった。でも今回は流れるように施設に入り、流れるように、目の見えない障害者の方の手を握り、手と口でコミュニケーションを取った。それは昨年の私には考えられなかった明らかな違いだと思う。その変化に驚

いたのは自分自身だった。

一日目に私は、ここの施設の二十年前の写真を見せてもらった。二十年もたっているのに、「○○さんだ！」と分かるほど変わっていない利用者の方々がたくさんいた。私たち「健常者」と呼ばれる人たちは、日々悩みやストレスを抱えて生きている人がたくさんいる。それに対して、私が接している障害者の方々は、毎日好きなことを、好きな時に、好きなだけする。そんな生き生きとした生活をおくっていたから、何年経ったとしてもその時のまま元気なのではないかと思った。

そして二日目、ある利用者の方に「一緒に喫茶店に行こう」と誘ってもらったので一緒に外に出た。すると、喫茶店に行くまでに商店街を通った時歩くと先々のお店に、一店、一店止まって、「おばちゃん元気?」、「今から喫茶店に行くねん」など、口を休める暇なくずっと喋っていた。声をかけられたお店の人はみんなその一言で笑顔になっていた。自分の発した一言、二言だけでみんなを笑顔にしてしまう。そしてある利用者さんは、ご飯を食べる時以外、何も見ずに何時間も紙を切り、同じ物をただただ作っている。そんな利用者の方々を見て、誰にでも恥ずかしがらずに笑顔で接することが出来たり、何時間も集中を切らすことなく、作業をすることが出来る、それは、私たち「健常者」と呼ばれる人が普段生活している中で「いいな」「うらやましいな」と思うような、性格や個性をその利用者さんたちは持っている、そう強く感じた。それはまるで、私たちが普段ゲームのなかで課金をしてまで手に入れたいレアアイテムをすでに持っているようなものだった。

「健常者と障害者」、その言葉の意味を私は、ワークキャンプを通し今ではその「違い」が分かった気がする。それは、私が手に入れたかった特別な個性や性格をもっている、そんな違いだったんだ。私はそんな利用者さんたちのことが、羨ましくもなっていた。

去年と合わせ6日間、同じ事業所に参加したか

らこそ学べるものがたくさんあった。

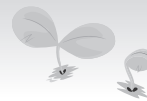
「ずっと、どうしてるか気になってたんや。」

そう言われ握られた手は、思ったよりもずっと、ずっと温かいものだった。

佳作作品

中学生の部

ワークキャンプを終えて



神戸市立鷹匠中学校

3年 朝日菜の葉

今回のワークキャンプでは知識が増えただけでなく、精神的な成長ができました。

私はいままでトライやる・ウィークなど学校の行事のようなもので以外体験学習をしたことがなく、自ら参加を希望したのは初めてのことでした。なぜ、参加を決めたのかというと、働くというものを見て将来の選択肢を増やしたかったからです。

四つの施設の中では、高齢者施設を選びました。そこが一番自分の将来と関係があると思ったからです。

体験初日、冷や汗で手がぬれるほどにガチガチに緊張していたことをよく覚えています。ですが、職員のみなさんや利用者の方々のおかげでリラックスして、体験に臨むことができました。

体験では、社会的なことから、職業特有のものなどいろいろなことが学べました。特に印象に残っていることは、「自助具」についてです。自助具とは字の通り自らを助ける道具です。私が紹介してもらった自助具は、お皿で、底にすべり止め加工がしてあるものでした。この加工がされていることでお皿がずれず食べやすいのだそうです。

食事の利用者さんを見ている時ふと思いました。「あ、こぼしてる」と。歳をとると手が震えると聞いたことがあります。そのせいで物が掴

みにくく、こぼれてしまうのだと思ったと同時に疑問も浮かびました。なぜ手伝ってあげないのかという疑問です。手が動かしづらそうな方もいました。ですが、みなさんぎこちなくても自分で動いて食べていました。なぜだろうと考えている時このようなことを言われました。「利用者の方々は赤ちゃんではない、自分で考えて動くことができる。」と。そこでハッとしました。私はかつてに利用者の方々は先輩だというのに、何も知らないと思いこんでいたのです。何も知らない経験したことのない赤子とはちがい、知識があり経験豊富です。もちろんプライドもあります。相手のことを考えない優しさはただの押しつけになると気がつけました。また、この時がきっかけで介護というのは相手のことすべてやるのではなく相手のサポートをするというのだと気づきました。

他にも、飲み物のとろみというものの話やトイレ事情、レクリエーションなどたくさんの事を見て学ぶことができました。利用者の方々とお話もためになったりおもしろいものばかりで楽しかったです。

ワークキャンプを終えて、私はいろいろ成長できたような気がします。また今回の体験の中でやりがいを聞いた場面がありました。「相手を思えばかえしてくれる。大変だけれど心が温まる所。」だそうです。体験をしてみると意味がようやく分かりました。将来、介護士目指してみようかなと思える体験でした。

佳作作品

高校生の部

ありがとう



神戸市立神港橘高等学校

1年 西田 知愛

私は今回のワークキャンプで、「ありがとう」という言葉の素晴らしさに気が付くことができた。「ありがとう」毎日何気なく使っているこの言葉に私は毎回気持ちを込めることが出来ているだろうか。そう、ふと考えさせられる出来事があった。

ワークキャンプ初日、私は楽しみな気持ちと不安な気持ちで頭がいっぱいの中、お世話になる施設を訪れた。お部屋に入るとすぐに、たくさんの人数で遊んでいる子ども達とは離れて、一人黙々とブロックで遊んでいる男の子が目に入った。話しかけに行っても初めは緊張しているのか、頷くだけだった。1時間ほど、他の子ども達も加えてブロックで遊んでいた。その時、一人の女の子がその男の子の一生懸命作ったブロックを壊してしまった。その男の子は泣きながら私に何かを伝えようとしていた。私はそれをなかなか理解できずにいたが、他の子ども達はそれをしっかり聞いて理解したらしく、みんなでブロックを元通りにしようということになった。ブロックが元の形に戻ると、その男の子は嬉しそうに元気いっぱいの声で「ありがとう」と言った。私はその時、こんなにも気持ちの込められた「ありがとう」は聞いたことがないし、私自身、言ったことがないのかもしれないなと感じた。「ありがとう」の言葉でこんなにも幸せな気持ちになれるのだと感動した。その出来事があったから私は、たくさんの子ども達と関わり学びを増やしていきたいと考え、できるだけたくさんの子と積極的に話して遊んだ。高校生と幼稚園児は、自分が思っていた以上に違って、高校生になってからでは出会えないような様々な価値観に触れることができた。

私は今回、ワークキャンプを三期全てに応募し、大変そうだなと内心想いつつも精一杯取り組んだ。一期・二期・三期とすべて保育園だったが、それぞれの施設で新しい学びがあった。

「ありがとう」は、どの施設でも当たり前に使われていて、私たちは小さい頃から人への思いやりの心や感謝の心に触れていたから毎日のように「ありがとう」の言葉を使うようになったのだと思った。小さいうちから積み上げてきたこの大切な気持ちを死ぬまで守っていききたい。

そして、このワークキャンプで保育士さんのお仕事をしっかり学んで終わるために私は、子ども達との遊び方や対応の仕方、話し方を重視してみている、子ども達のことを大切に思う気持ちのほかに尊敬の心もあるんだと感じた。大人の方が偉いとかそういうことを考えていなくて、子どもも大人も同じ立場の上で上手く関わっていくことが大切なんだと気付いた。子ども達が先生のことを信頼して尊敬しているのは、それぐらい大切にしてもらっていることを分かっているからだと思う。お互いに尊敬し合い大好きだからこそ保育園という施設は成り立っているのだと深く考えることができた素晴らしい経験だった。

これから私はたくさんの人と関わりながら生きていくことになるし、その一人一人を大切に、尊敬しあっていききたいと思う。そのためには、「ありがとう」を増やしていくことが必要だ。バスから降りる時やお買い物をした時にもしっかりと気持ちを込めて「ありがとう」と、これからも伝えていきたい。

私は残り2年と少しの高校生活の中であと何回「ありがとう」が言えるだろうか。「ありがとう」の大切さは小さい頃から教えてもらっていたんだなと思った。だから、今まで以上に感謝や尊敬の心、思いやりの心を持って「ありがとう」を増やしていきたい。

ワークキャンプで学んだたくさんの大切なことを忘れずに生活していき、それを必ず活かしてい

きたいと思う。自分だけでなく、周りの友達や家族にも「ありがとう」の大切さをもっと広めていきたい。

佳作作品

高校生の部

コミュニケーションの大切さ

神戸市立神港橋高等学校

1年 島 彩那

私は今回のワークキャンプで多くの学びを得られましたが、その中でもコミュニケーションの大切さは特段学ぶことができました。

私が行くことになった施設は、障がい者施設でした。そこでは、知的障がい、視覚、聴覚障がいなど症状の重さ関係なくたくさんの方が一緒に作業をしていました。主に関わったのは知的、聴覚障がいの方でした。

まず、知的障がいの方と関わってみて、いつもの速度や伝え方では間違った伝わり方になってしまっていました。ゆっくり、細かく分かりやすいように会話することをずっと意識していました。会話が詰まると待ったり、正しく聞こう、と普段と全く違うので、初日は一日中苦戦、反省をしていました。二日目に聴覚障がいの方と口述筆記をしました。そもそも聴覚障がいの方と関わること自体が初めてで、緊張していました。施設の職員の方が伝達していることをノートに書いて伝えるという単純な作業でしたが、伝わった時の嬉しさ、達成感は今でも忘れられません。伝わったのか、うん、とうなづいてくれたのが、本当に嬉しかったです。だからこそ、手話があればもっと会話が広がったのかと思いました。

また、私はあまり自分から話しかけられる性格ではないのでそもそも会話を始められるのか心配していましたが、話すのが好きだ、という方が多く、三日間楽しく会話ができました。私が利用者

の方々を助けなければいけないのに、私が助けられていて、本当にありがたかったです。

そして、私が三日間一緒に作業していて一番感銘を受けたことがあります。それは、利用者の皆さんが自分のできることを一生懸命にやっていることです。当たり前のことかもしれないけれど、私たちよりハンデがあるということを考えると、決して簡単なことではないと気付きました。当たり前のことを当たり前のようにしたいと思えました。

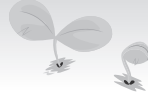
私は親戚の中に障がいがある人がいます。親戚でさえもコミュニケーションがあまりとれず、どうしたらいいのかわからずじまいでした。それでも今、少しずつ話せているのは今回の経験があったからこそだな、と思います。コミュニケーション能力は、将来どんな職業に就いても大事だし、これからの高校生活でも必要不可欠です。いつも一緒にいる友達や家族とのコミュニケーションだけでなく、初対面の人との会話を大切にしたいです。

私には、将来言語聴覚士になるという夢があります。利用者の方々と関わることで、将来のために何か得られることがあるのかな、と思い応募したワークキャンプでしたが、コミュニケーションの大切さ以外にも、本当にたくさんの学びが得られました。一日目にして諦めたくなくなりましたが、利用者の方、施設の方に支えられて、実りのある、本当に楽しい三日間でした。三日間のことを忘れないよう、これからは手話の勉強や、色々な人とコミュニケーションをとることを意識して高校生活を送っていきたいです。

佳作作品

高校生の部

涙のありがとう



神戸野田高等学校

1年 志賀 茉幌

「お姉さん。コップ取ってきて。お茶を入れて」と長い時間叫んでいる。なぜだろう。コップは目の前にあるのに。とても疑問に思った。その他にもティッシュを何枚も取り丸めてまた広げてと繰り返している人。独り言を大きい声で言っている人。私は衝撃を受けた。三日間この場所でやっていけるのか。とても不安になった。色々思いながら三日間のワークキャンプが始まった。

一日目の朝。私は元気よく「おはようございます。三日間よろしく申し上げます。」とお会いする方全員に挨拶をした。そして返ってくる返事は「今日からだね。頑張るね。高齢者施設は色々な個性、特性を持った人がいるの。だから、その人にあった話し方、対応を三日間で観察してね」と笑顔で言われた。私は元気よく「はい」と言った。でも、心の中では「個性、特性って何だろう。障害者施設ではないから、皆同じじゃないの」と思った。そんな事を思いながら三日間お世話になる二階のフロアへ行った。私が今日行う活動内容は三つあった。一つは利用の方とのコミュニケーション。二つ目は入浴の見学。三つ目は昼食の準備。一日目で一番つまづいたのは利用者の方とのコミュニケーションだ。話をする時は、床に膝をつけて相手の方と視線を合わせるが一番大切だ。それを行いながら話をするが、いっこうに話が続かない。なぜなら、相手は認知症の方だからだ。だから何度も同じことを言ったり話している話題とは違う事を話したりしていた。でも、相手の方に耳を傾けて何を伝えたいのか何を話しているのかを聞くために相づちをうったり自分の話もした。話が終わるとその方は満面の笑みで「ありがとう」と言った。とても嬉しかった。話をした

だけでこんなにも喜んでくれて、互いに笑顔になって。とても良い時間だった。一日目はこの瞬間が一番印象に残った。

二日目の朝。気持ちよく挨拶をしてまた二階のフロアへ向かう。一日目とは違い今日は入浴の手伝いがある。実際にお風呂へ入り、その後ドライヤーで髪を乾かしたりする。スムーズに行えるように、施設に来た人から順番に入浴していく。私もフロアへ着いたら急いで濡れてもいい服に着替えた。脱衣所は利用者の方が寒くならないように少し暖房がきいていた。私はまず初めに利用者の方の髪を洗った。髪の洗い方やシャンプーの強さなども好みがあるそうだ。「これぐらいの強さで大丈夫ですか。かゆい所はないですか」「うん。そのまま続けて。」慎重に髪を洗った。その後身体を洗い終わると、お風呂場を二人で上がった。その方は自分で着替えるので手伝わなかった。着替えるのにとても時間がかかった。もしかしたらこれを読んだ人はこう思うかもしれない。「なぜ手伝わないの」と思うかもだ。でも、自分で出来る事は自分です。どんなに時間がかかっても。出来る事を私が奪ってはいけない。だから、手伝わなかった。その後、ドライヤーを行う。ドライヤーは私も普段しているから慣れている。でも、人の髪を乾かすのはとても難しかった。女性の方なのでくしで髪を解きながら乾かしていく。「嬉しい。お姉さんに乾かしてもらえるなんて。一番幸せだね。」「ありがとうございます。」乾かし終わると涙ながらに「ありがとう。」私は嬉しかった。髪を乾かすだけで涙ながらに喜んでくれる事に。笑顔になってくれる事に。

三日目は残念ながら私情により参加することができなかったが、二日間という短い期間で多くの事を学ぶことができた。一つ目は、互いに助け合う事。私達はもしかしたら何もかも自分でしないといけない、助けられるのは恥ずかしいと思っている人がいるかもしれない。どの人でも完璧に何もかも達成したり出来たりすることは出来ない。

だからこそ、小さく狭い心や思考を持つのではなく大きく広い心や少し思考を変える事で、自分の心も少しは楽になり笑顔になったりその人が出来たら私も出来るという小さい可能性が生まれるのではないかと考えた。二つ目は行動する事。一番難しいのは行動しようとする決断だと思う。でも、何か行動する事で自分に自信がついたりまた新しい目標が見つかると感じた。今回のワークキャンプで学んだ事をこれからの生活に生かしていきたいと思う。

佳作作品

高校生の部

ワークキャンプで学んだこと

神戸国際高等学校

1年 堀見さくら

私はこの夏、3期全てデイサービスセンターに行っていた。人生初のワークキャンプだったけど、この経験が将来に少しでも役立つものになればいいなと思い、参加した。

一か所目の施設は定員18名の地域密着型のデイサービスセンターだった。ワークキャンプ初日、緊張と不安で胸がいっぱいの中インターホンを鳴らすと施設の方が「おはようございます」と笑顔で快く迎えてくれた。施設の中に入ると利用者さんはもう集まられていて、楽しそうにお話されているところだった。施設の方にロッカーを案内してもらい、準備をした後、利用者さんのいるところに向かった。午前中はお話ししながら、一緒に塗り絵やクイズをした。クイズでは、ずっと分からなくてもやもやしていた問題が解けてスッキリしたと喜んでくれて嬉しかった。

お昼の時間になると食事の配膳の手伝いをした。配膳のたびに「ありがとう」の言葉をかけてもらえてその度に嬉しい気持ちになってもっと頑張ろうと思った。「ありがとう」という言葉は言

う側も受け取る側も幸せな気持ちになれる魔法のような言葉だと感じた。感謝の気持ちを言葉にし、伝えることで誰かの励みになったり、喜びに繋がるということを忘れずに「ありがとう」の言葉をたくさん周りにかけていける人になりたいと思った。

午後は体操をしてから、レクリエーションでしりとりと輪投げをした。しりとりをしているとある利用者さんのところでつまってしまった。その利用者さんが単語が思いつかず「どうしよう」と困っていると、近くにいた利用者さんが「〇〇もあるよ」とさりげなく教えてあげていた。私はその困っている人を進んで助ける姿に感銘を受けた。

2期では1期で出来なかった自分から話しかけに行くということを意識した。介護士さんに「あまり気を使い過ぎずどんどん話しかけてあげてね」と言われた。私は思い切って一人の利用者さんに話しかけた。利用者さんは一瞬驚いて、でもすぐに笑顔で「イスを持って隣においで」と言ってくれた。最初は何を話せばいいかわからなくて少し黙り込んでしまった。でも自分が黙り込んでいたらだめだと思い「お家はここから近いんですか?」「何するのが好きですか?」と思いつく限りのことを質問した。沢山質問しても全く嫌そうにせず、むしろすごく楽しそうに話してくれた。距離が縮まった気がして嬉しかった。私は何かしている時に話しかけたら迷惑になるのではないかと不安でなかなか自分から話しかけに行くことが出来なかったけど、自分が誰かに話しかけてもらえたら嬉しいと思うのと同じように、利用者さんにとっても話しかけてもらうのは嬉しいことなんだと気付くことが出来、どんどん話しかけていこうと思った。少し勇気を出して自分から話しかけにいったことで多くの利用者さんと仲良くなることが出来、楽しい3日間になった。また笑顔の大切さについても学ぶことが出来た。私が仲良くなった利用者さんの一人に目が合う度に120%

の笑顔を見せてくれる素敵な方がいた。私はその笑顔に毎回元気をもらい、自分もつられて笑顔になった。私はそのとき、笑顔は連鎖するのだと気付いた。自分が笑顔だと相手も笑顔になり、相手が笑顔だと自分も笑顔になる。一人の笑顔が広がっていく。だから私は自分がその笑顔の発信源となり、笑顔を広げていけたらいいなと思った。

3期では利用者さんの食事を見せてもらった。介護士さんは「色々な食形態があり、飲み込む力が弱くなった人にはきざみ食、ソフト食、とろみ食の3種類を用意していてその人に合う食事を出している」と説明してくれた。ちょうどその日ソフト食ととろみ食の方がいて食事を見ることが出来た。ソフト食は通常の食事よりもやわらかめに、とろみ食は食材をミキサーにかけてペースト状に調理されていた。私は原型がなくなったとろみ食を見てどこか寂しい気持ちになった。私は食べることが大好きだけどその食事はすすんで「食べたい」と思うことが出来なかった。私は目で楽しんで咀嚼して味わって食べる楽しみを持っていることは、決して当たり前ではなく、すごく尊いことなんだと気付くことが出来た。何事も当たり前だと思わずに感謝することを大切にしたいと思った。

笑顔は連鎖し、「ありがとう」と感謝の気持ちを言葉にし伝えることで自分も相手も心が温まり幸せな気持ちになれる。またコミュニケーションを取るのに大事なものは少しの勇気と相手のことを知りたいと思う気持ち、そして笑顔だと学ぶことが出来た。多くの学びを得ることが出来、自己成長を図ることが出来た今回のワークキャンプ、参加することが出来て本当に良かった。関わってくれた全ての人への感謝を忘れず、成長し続けたい。

令和6年度「心の輪を広げる体験作文」入賞作品

応募作品数

小学生の部	41点
中学生の部	14点
高校生・一般の部	25点
合計	80点

33

最優秀賞

【小学生の部】

みんなが笑顔になるように 神戸市立垂水小学校 4年 真田 志歩…………… 34

【中学生の部】

私 の 妹 神戸市立本多聞中学校 1年 廣田 結月…………… 34

【高校生・一般の部】

生きる意味 関西創価高等学校 1年 榎本 あおば…………… 35

※本作品は内閣府での審査の結果、優秀賞（内閣府特命担当大臣表彰）高校生区分を受賞しています。

優秀賞

【小学生の部】

障害があっても同じ心をもつ人間 神戸市立丸山ひばり小学校 4年 今田 凌斗…………… 36

【中学生の部】

障がい者が笑顔で暮らせる世の中へ 神戸市立本多聞中学校 1年 佐藤 颯亮…………… 37

【高校生・一般の部】

障害者と健常者の狭間で 千日紅…………… 38

佳作

【小学生の部】

わたしのおじいちゃん 神戸市立こうべ小学校 3年 吉村 夏凜…………… 39

私の大事な友達 神戸市立義務教育学校港島学園 5年 谷吉 英恵…………… 40

【中学生の部】

人の温もり 神戸市立大沢中学校 1年 大迫 まり…………… 40

ワタシとアナタ 神戸市立神陵台中学校 3年 若松 華瑠亜…………… 41

【高校生・一般の部】

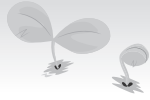
赤いインク らん…………… 42

豊かな社会の実現 神戸市立神港橘高等学校 3年 郷原 芽依…………… 43

最優秀賞作品

小学生の部

みんなが笑顔になるように



神戸市立垂水小学校

4年 真田 志歩

わたしには、おじいちゃんがあります。おじいちゃんは、長い間入院していたので、あまり歩くことができません。右手右足を思った通りに動かすこともほとんどできません。また、聞かれたことに対して首をたてやよこにふって返事をすることはできますが、会話をすることはできません。

おじいちゃんは、昔は歩くことも会話をすることもできていました。元気なころのおじいちゃんといっしょに遊んでいて覚えていることがたくさんあります。その中でもとくに心に残っていることが2つあります。

1つ目は、バランスボールをしていたときのことです。私がバランスボールの上に乗ってバランスをとっていたときに、何回落ちてもそのたびに時間をはかってくれました。最高記録の9分をこえたときに、「すごいな。」といっしょに喜んでくれたので、とてもうれしかったです。

もう1つ印象に残っていることは、私がふっきんをがんばっているときに、足をもって支えてくれたことです。お父さんやお母さんの帰りがおそいときに、私はおじいちゃんの家に行って毎日ふっきんをしていました。お姉ちゃんといっしょに100回チャレンジをしたときも、足を支えておうえんしてくれました。とても楽しかったです。

そんな元気なおじいちゃんが、ある日とつぜんたおれてしまいました。たおれた後に入院をしていたのですが、コロナが流行っていたので、全くあえませんでした。おじいちゃんが退院してべつのしせつにうつってから、お見舞いに行けるようになりました。久しぶりに会ったとき、おじいちゃんのふんいきが変わっていました。会話がしづらくなっていたり、歩きにくくなっていたりし

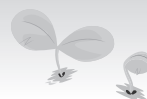
ました。今までと大きく変わり、いっしょにしていたことができないのだと思い、とてもショックを受けました。でも、何回もお見舞いに行っているうちに、おじいちゃんのかた方の手を手すりにおいて、もうかた方の手をおばあちゃんやお父さんに支えてもらいながら歩いたりキャッチボールをしたりすることができるようになりました。遠くから投げてもボールをキャッチできたり、大なわのなわを持てるようになったりするなど、おじいちゃんができることが多くなってきて、少しずつ前みたいに遊べると思ってうれしかったです。

おじいちゃんのいろいろなすがたを思い出しながら、しょうがいについて、あらためて考えました。すると、まわりの人が笑顔で支えていると、その人も笑顔になることに気づきました。おじいちゃんが喜んでくれるのでわたしはおじいちゃんともっといっしょに手をつないだり、指ずもうをしたりしたいなと思いました。わたしは、今までおじいちゃんにいろいろなことを支えてもらいました。だから、今度はわたしがおじいちゃんのことを少しでも支えられるようになりたいです。そして、この世界のしょうがいがある人たちにおじいちゃんと同じように笑顔でかかわることで、わたしもその人も笑顔になるように、これから生きていきたいです。

最優秀賞作品

中学生の部

私の妹



神戸市立本多聞中学校

1年 廣田 結月

私の妹は小学5年生で、障害を持っています。先天性の障害で、人よりも脳の発達がおそいという症状があります。赤ちゃんの時から、定期的に病院へ通い、月に数回、PT(理学リょう法)、OT(作業リょう法)、ST(言語聴覚)を鍛える訓練を受け、

学校でも、感覚（物にふれる）という授業などを受けています。

そんな妹と外出する時、車椅子が関係し、行ける所が限られてしまいます。遊園地に行っても、激しい動きをするアトラクションなどは、体が緊張してしまって、乗る事が難しいです。妹が乗れるのは、メリーゴーランドや観覧車、コーヒーカップなどの、小さい子向けのゆっくりしたアトラクションと、数少ないです。逆に、好きなペースで、ゆっくり回れる動物園や、水族館などは、家族みんなと一緒に回れて、妹も楽しんでいそうなので遊園地よりはみんなで楽しむ事が出来ます。

でも、さらに良いと思ったのが、「インクルーシブ公園」です。その公園は、ブランコにはシートベルトが付いていて、安全に遊べるし、すべり台も、小さい子向けの作りになっていて、妹でも遊ぶ事が出来ます。そこで何よりもうれしかったのが、妹と同じ遊具で遊ぶ事が出来た事です。今まで妹とは、近所の公園に行ったとしても、一緒に遊んだりする事が出来ませんでした。だから、同じ遊具で遊んだ時は、とてもうれしくて、楽しかったです。

よくあることなのですが、外出時に、小さい子供ほど、妹とすれ違った時、妹の事を、まじまじと見てくる事があります。最初の頃は、少し嫌な気持ちになる事もありましたが、普段から障害者と接している人がそもそも少なく、そんな子たちからしたら、妹のような障害者には、違和感を持つのだと思います。

ところが近所に住んでいて、妹ともとても仲良く接してくれる子がいます。最近は全然会っていませんでしたが、この前久しぶりに会った時その子が、「〇〇ちゃん、こんなん出来るようになってるやん。」と、妹を褒めてくれました。その時から、確かに、バリアフリー設計があったり、エレベーターがあったりするのには便利で嬉しいけれども、一番は、障害者の事について、「知る」事が、共存するためには大切なんだろうと思い始めてい

ました。私は、普段から、障害者である妹とふれあっているの、関わりの少ない人よりかは障害について知っています。そんな私でも、まだまだ知らない事が沢山あります。私は、1人でも多くの人に、障害について知り、その上で、障害を持った人々に共感し、関わってほしいと思います。

家族に障害者が居ると、気を付けなければいけない事が多く、不便な事も多いですが、障害に対する理解が広まり、障害のある人たちとの生活に、違和感が無くなり、障害の有無に関わらず、社会の一員として、おたがいに支え合う社会になってほしいです。

最優秀賞作品

高校・一般の部

優秀賞(内閣府特命担当大臣表彰)高校生区分受賞作品

生きる意味



関西創価高等学校

1年 榎本 あおば

「障がい者なんていなくなればいい」「障がい者是不幸をばらまく存在」理由もなくつけっ放しになっていたテレビからこんな言葉が聞こえてきた。ある障がい者施設で起きた殺人事件の容疑者の供述であった。私は頭を強く殴られたような衝撃を受けるとともに心を深くえぐられるような感覚に襲われた。

私の祖父は障がい者等級1級のいわゆる重度障がい者だ。脳梗塞を発症し、一時は危篤の状態まで陥ったが、なんとか命をつなぐことができた。しかし、後遺症として言語障がいや右半身の麻痺が残ってしまった。5文字程度までの短い単語なら、後に続いて発することができるが、ほとんど会話はできない。歩くことや立つことすらできず、寝るとき以外はずっと車椅子に座って時間を過ごす。もちろん自力で寝たり、起き上がることもできない。自力では生活がままならないのだ。

最近、祖父がまだ元気だった時のことをよく思

い返す。祖父母の家は名古屋にあり、私が住んでいる神戸から車で3時間程かかる。学校の長期休みに遊びに行った時にはいつも「よく来たね。」と迎え入れてくれた。お風呂から上がってきた時には大きなお腹を叩いて笑わせてくれるのがお決まりだった。スーパーで買ってもらって美味しいねと言いながら食べた、熱々の鯛焼きの味。近所の駄菓子屋で買ってもらった、たくさんのお菓子。一緒に庭で花火をしたり、動物園や水族館に行ったり…。祖父がつい昨日まで元気だったかのように鮮明に記憶が蘇ってくる。今の祖父には不可能なことばかりである。でも、そんな祖父を嫌いにはならない。「いなくなればいい」とか「不幸だ」などとは思わない。むしろ祖父は私に生きる希望を与えてくれる。

祖父が危篤の状態だと知った時、正直私は祖父とはもう会えないのかもしれないと思った。なんとか生きてほしい、それだけだった。大きな後遺症が残り、前のように遊んだり、話すことすらできないと知った時、もちろんショックはあった。でも、それ以上に祖父が生きてくれているということが嬉しくて嬉しくてたまらなかった。また、祖父の命が一生懸命生きようと叫んでいるのだと私は感じた。ほぼ一日中車椅子に座っているだけの祖父であるが、その祖父の姿を見るたびに私も頑張るって生きようと思わされる。

人の存在価値はその人の能力では決まらない。その人の存在そのものが最も尊く、周りの人の生きる希望になっていると私は思う。赤ちゃんだってそうである。ごはんは食べさせてもらう。おむつもかえてもらう。何かあると泣きわめく。でも、その存在は周りを明るく照らし、笑顔にする。しかし、人々はそのことを忘れてしまう。それは、世の中が相対的評価であふれているからだと思う。成績や業績で人々は評価され、その評価が良い人が社会的に認められていき、優位に立つ。反対に悪いと見下されたりしてひどい扱いを受けることもある。そのような相対的評価を気にするあ

まり、自己嫌悪に陥って悩み、苦しんでいる人も多いだろう。私も実際にそうである。私は中学2年生の頃に体調を崩し、学校に通えない期間が長くあった。授業に参加できず、自力で勉強はしていたものの、限界があり、不安でいっぱいだった。勉強もまともにできず、両親や先生にも迷惑をかけてばかりの自分には存在価値などないのではないかと思うこともあった。そんな私に生きる意味を教えてくれたのが祖父の姿だった。祖父は語らずして私を励ましてくれていたのだ。

障がいがあるとかないとか、何ができるかできないかで人の存在価値は決まらない。その人にはその人にしかない生き方、使命が必ずある。それを尊重し合える社会ができたらいいな。いや、私達が作っていかなければならないのだと思う。

優秀賞作品

小学生の部

障害があっても同じ心をもつ人間

神戸市立丸山ひばり小学校

4年 今田 凌斗

障害とは、身体、知のう、せいしん的に何らかの障害がある人のことを言います。

ぼくのお姉ちゃんは知的障害で今年の4月から、支援学校の高等部に入学しました。お姉ちゃんの通う学校には、車いすに乗っている人、言葉がしゃべれない人、急に大きな声を出す人色々な障害をもっている人と一緒に学校生活をおくっています。

ぼくはお姉ちゃんに「そんな学校で何をするの?」とこの夏休みに聞いてしまいました。お姉ちゃんは、すごい怒った顔で「そんな学校なんて言うな!!みんな同じ心をもった人間。そんな学校だなんて言わんといて!!」とすごいおこられました。

ぼくのお母さんは、少ない時間だったけど就労

継続支援 A 型事業所で仕事をしていました。それは、お姉ちゃんの障害と向きあうために福祉の勉強がしたくてはじめたお仕事だったそうです。ぼくとお姉ちゃんの言いあう様子を見てお母さんは、ぼくに「人って言う漢字は人が立って身体を屈伸させるさまを横から見た形にかたどり、「ひと」の意を表す。とケイタイで調べたら出てくるけど、人は人と人が支えあっている様子をとらえて人って言う漢字ができた。とも言われているんだよ。だからね、障害があってもなくても人は人、皆同じ人間。凌斗がうれしかったり、悲しかったり、はらがたったりするように、人は同じ心をもった人間なんだよ。」と言われました。また、お母さんがこの数カ月福祉の仕事をして勉強したことを教えてくれました。言葉がしゃべれなくても一生けん命にお母さんに「こんにちは。」と伝えてくれる人や、絵がとく意な子がいてそれを仕事に生かしている人、こつこつ作業をするのが好きで一生けん命同じ作業をていねいに一つ一つ作業をする子。みんなちがってみんないい。その言葉は本当にいい言葉なんだよ。障害者だから。とまだまだ社会は色めがねで見て判断してその人のいいところもわるいところも見ようとせずに障害を持っているから。ときめつけてしまうとところもあるけど一生けん命生きているのは障害者だろうとふつうの人だろうと関係ない。みんな同じ人間だからね。だから、お母さんは、しょうらい、福祉と福祉と人が手を取りあいよりよい社会になってほしいとねがっているんだよ。と話してくれました。

ぼくは、お姉ちゃんに「そんな学校っていってごめんね。」とあやまりました。ぼくに何ができるかはわからないけど、お母さんが言う色めがねで人を見ず、福祉と人とが手を取りあって生きていける社会になることをぼくもねがうことにしました。まだまだ4年生で子どもなぼくだけ、ぼくが大人になるまでに、一人一人が生きやすい社会であってほしいです。

優秀賞作品

中学生の部

障がい者が笑顔で暮らせる世の中へ



神戸市立本多聞中学校

1年 佐藤 颯亮

私のお父さんは、兵庫県警に勤めていて、車いすで生活を送っています。

白バイ隊員だったお父さんは、私が1才のときに訓練中に事故に遭い、脊髄が損傷して下半身不随となってしまいました。

お父さんは、自分の下半身が動かなくなってしまったとき、「この先どうになってしまうんだろう……」と絶望し、暗い気持ちになったそうです。それでも家族のため、いろんな人のためにと一生懸命リハビリをして、少しぐらいの距離なら杖をつけて歩けるようになりました。ただ、外出するときは今も車いすです。

一緒に出掛けていると、車いすでの生活は不便なことがたくさんあります。

私たちが出来る手助けを可能な限り行うのはもちろんですが、私がお父さんを見ていてとても重要だと感じたのは、パラリンピックです。パラリンピックには、「もう自分はスポーツなどできない」と考え、未来に希望が持てないそんな暗い気持ちになってしまった障がい者でも一緒に楽しめ、熱くなれるスポーツがたくさんあります。私のお父さんは、8年前からパラスポーツの選手発掘プログラムに参加したのをきっかけにパワーリフティングという競技を始め、今年初めて日本代表選手としてパリパラリンピックに出場することになりました。

パワーリフティングは足などに障がいがある選手がベンチプレスで持ち上げたバーベルの重さを競う競技です。

個人的に誇らしい気持ちや嬉しさはもちろんありますが、きっと昔のお父さんと同じように悩み、気持ちがふさぎ込んでいる人たちにもパラアス

リートが頑張っている姿というのは元気を与えられると思います。「パラリンピックのスポーツを通して障がい者自身も心にゆとりができ、人生の生きがいになっていくんだ」とお父さんは言っていました。そのことに加え、健常者もパラスポーツに関わることで障がい者との心の輪も広がっていくと私は思います。

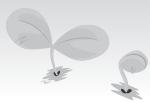
最後に、私は健常者と障がい者・お年寄りの方や妊産婦の方など誰もが笑顔で暮らしていくのに一番大事なのは、お互いの助け合いや支え合いだと感じています。

私はこれからも、さまざまな状況・立場にいる人たちと支えあっていきたいと思います。

優秀賞作品

高校・一般の部

障害者と健常者の狭間で



千 日 紅

障害者と健常者というのは、全く違う存在なのか。健康だった頃は、障害者の人は大変だなと漠然に思っていた。

例えば、電車にある優先座席。今なら当事者の気持ちも少しだけ分かるような気がする。健常者の人より疲れやすい体質の障害者の人も中にはいるだろう。うつろうつろに優先座席に座る人がいる。「人それぞれの事由があって、ヘルプカードが存在するのかもしれないな」とふと思う。中には叫び声を上げ、落ち着かない様子で座る人もいる。「不安なのかもしれないな」と気持ちを寄せながらも、「他の事由があるのかもしれない」と平然を装う自分がある。「障害者といえど、人それぞれの事由があるので、分かったつもりはしたくない」と思う。ただ、電車に乗っているだけでも、見える景色が前とは違う今、人それぞれの人生があり、知り合いになるのは、ほんのわずかな

人だけ。電車で乗り合わせたただだけれど、その間だけは心地良い空間になるよう、1人の市民として過ごしていければ良いと感じる。

その様な中で思った事が、当事者であるから出来る配慮。合理的配慮が世間で議論されている中で、「当事者であるからこそ出来る助け合いがあるのではないだろうか」と思う。

誰もが当事者になりたくてなっている訳ではない。合理的配慮が求められる世の中で、当事者に接する時に私なりに気を付けている事、振り返っている事がいくつかある。

まず1つ目は、許容範囲を大きくもつ事。

精神障害者の当事者同士で話をしていると、世間に対する劣等感を口にする人が多い。それぞれの人生の中で挫折を経験しており、中には「障害者でないとやっていけない」と話す人もいた。劣等感から不安やざわつきに結びつく人もいるようである。その中の一人である私も、不安からくる行動で世間を困らせたことがある。世間からしたら困った人、迷惑な人なのだろうが、本人からしたら、不安やざわつきで平常心ではいられない困った状態だったのだ。

その様な経験から、許容範囲を大きくもつ事が、とても大事だと感じる。困った迷惑な自分から、不安だった自分へと、自分自身を自分で許す所から始めて、社会生活を営んでいく。偶然、電車に乗り合わせた人の中でも、一見、悠然としている人もいれば、困った様子の人もある。しかし、悠然としているように見えていた人も、不安な日々を過ごしたことがある人かもしれない。困った様子の人、普段からすると落ち着いている状態なのかもしれない。その様に見ていると、私自身変な劣等感に苛まれるのは辞めようと思う。一人一人が移動の為に乗車しているだけである。少しぐらいの事は許容し合い、過ごしやすい空間づくりが出来たらいいと感じる。

2つ目は、必要以上の配慮はしないという事。一人一人、生きる力をもっていて、自分なりの信

念や考え、プライバシーをもっている。過干渉になる事で、個人の力をさげすむことはしたくない、されたくないと感じる。障害者の人の中には健常者の人よりも優れた能力を発揮する人もいる事は、よく言われており、私が通っているデイケアでも、非常に優れた絵を描く人がいる。その絵が飾られる度に、心とむ私がある。心の中で感謝状をその人に送っている。そして、私自身も、就労に向けて取り組んでいるところであり、障害者であっても社会に貢献したいと思っているところである。私に出来ないことも沢山あるが、出来ることもある。障害者だからといって特別視する世の中というより、健常者と障害者が分け隔てなく、手を取り合える世の中であってほしいし、その中の一員でありたいと思う。

当事者になったからこそ見える景色が今あり、気づくこともある。大変そうに見えていた障害者も、一人一人違った個性があり、人生がある。一人一人が自分の人生を謳歌して欲しいし、自分も謳歌したいと思っている。自分の体験、経験を人生の肥やしにして、豊かな人生をこれからも積み重ねていきたい。

佳作作品

小学生の部

わたしのおじいちゃん



神戸市立こうべ小学校

3年 吉村 夏凜

わたしのおじいちゃんは、びょうきで50さいぐらいから少しずつ目が見えづらくなり、わたしが生まれる前に全く見えなくなりました。

お家での様子は、ごはんを食べる時は、時計を基におしえてあげます。たとえば、

「お皿の12時方向にサラダがあるよ。」

「6時方向にごはんがあるよ。」と言います。手でさぐり、どこに何があるかかくにんしてごはんを

たべます。

かいだんやおへやでは、かべやものをさわり、ゆっくりすすみます。

さいきん耳が遠くなり、テレビを聞くときは見る事ができないため、音を大きくして耳からじょうほうをあつめます。

おじいちゃんは、「デジタルろく音図書」という聞くだけの話を2週間に1回かります。じだいげきのお話をよく聞いています。聞いて、おじいちゃんがいろいろとそうぞうして、「甘い物がたべたいな」と言います。目が見えないけれど、そうぞうができるので、すごいなと思いました。わたしは、そうぞうできるけれど、おじいちゃんの方がすごいと思いました。

出かけるときは、おりたたみできるステッキをもって出かけます。ふだんは、2人でいくけれど、週1回ガイドさんが来ておかいものにいきます。たまに、何かかってきてくれるので、うれしいです。

ステッキの色は、白、赤、黒です。けれど、歩いているとたまに、はくじょうという真っ白なステッキをもっている人を見かけます。しらべてみると、色で、「全く見えない」「少し見える」「ぼんやり見える」がはんだんするそうです。わたしのおじいちゃんは、「全く見えない」の色です。

こんどは、「少し見える」の色と、「ぼんやり見える」の色をしらべてみたいなと思いました。

わたしがたまに、手をつないであげて、お手つだいしてあげます。しょっきがどこにあるかおしえてあげます。

わたしは、いろんなてつだいをしていますが、しょうがいがある人をてつだってあげるボランティアをやりたいなと思いました。

今でもできることを考えてみたいなと思いました。

佳作作品

小学生の部

私の大事な友達



神戸市立義務教育学校港島学園

5年 谷吉 英恵

今年、学校のプールの授業でこんな出来事がありました。私はプールの授業が大好きなので、1人でガッツリ泳いだり、友達と楽しく一緒に入る予定だったのですが、最初は、バディになった子にはとても申し訳ないのですが、とてもショックでした。なぜかというと学校のプールの授業のバディ（ペア）は背の順の隣の人になります。誰と一緒にになったかということ、その子がなかよし学級の子で、日直の日の朝の会の時ですら、後ろから2列目の人には聞こえないくらいの小さい声でしゃべりません。しかも、そういう絶対にしゃべらないといけないとき以外は、しゃべらないので、プールの授業で、どのようにしたらいいかを話しながら、泳がないといけないときに、私よりもっとこうしたらいいと思うと言ったら、うなずいては、くれるのですが、もっとこうしたらいいと思うかを言ってくれないので、自分もあまりどのようにしたらいいかわからなくて、結局無言になることが、続くことが多く、とても最初は、気まずかったからです。ですが、ちょうどその間に、個人懇談会があって、お母さんが行ったときに、「今プールのバディの子がなかよし学級の子なんですけど、優しく接してくれてます。そのおかげで、最初は結構プールは見学していたことが多かったのですが、今は、ほぼ毎回プールに入るようになりました。」と言ってくれたらしくて、それが、とっても嬉しかったので、それを励みに、最後まで無事プールを終えることができました。最後らへんには、私が、喋った後には、ほぼうなずいてくれたり、微笑んでくれたりとかか返事の代わりになることをしてくれ、実際に私が言ったことを試してみたりしてくれるようになった

てくれたので、少し心が通じたような気がして、心が温かくなりとても嬉しかったです。たとえ障がいがあっても、同じ人間だし、その人も避けられたりしたらとっても悲しいと思うので、これからはなかよし学級の子とも仲良くできたらいいなと思ったので、これからは優しくしたいなと思いました。

佳作作品

中学生の部

人の温もり



神戸市立大沢中学校

1年 大迫 まり

私は、今年の5月に、学校全体で「神戸2024世界パラ陸上競技選手権大会」を観戦しに行った。私は、もともとスポーツ観戦は、好きな方で、2020年のパラリンピックもテレビ越しに観戦していたので、この大会を観戦しに行くと言った先生から、話された時、とてもうれしかった。

大会当日、私はわくわくしながら、ユニバー記念競技場へと向かった。その日、私の学校は午前の部を観戦した。ずっとみんな夢中で観戦して、とても楽しい一日だった。

この大会で、印象に残った部分は、主に3つある。

1つ目は、視覚障害クラスの200メートル走だ。この競技では、ガイドランナーが全力で並走し、選手の進むべき方向、コーナーの曲がり方、残りの距離などを的確に伝えるのだ。なので、選手の走る技術だけではなく、選手とガイドランナーの連携も、重要である。この競技を実際観戦していると、試合中だけでなく、試合直前や試合直後に、お互い声かけして、選手も本当にガイドランナーが見てるかのように、お互い向きあって、ほほえんでいたことが、素てきに感じた。

2つ目は、女子切断機能障害クラスの走幅跳だ。

この競技で印象深かったことは、試合が終わり、選手権を獲得した3人は、人種も全く違うが、3人共笑顔で、それぞれの国旗を背負い、肩を組んでいる姿に感動した。

3つ目は、この日の大会で、横に座っていた友達と、たくさんの選手に、マジックペンと大会限定のメガホンを持って、サインくださいと話しかけていた。けれど、午前の部が終わっても、まだサインはもらえず、あきらめていた時、奥から、少し前に肩を組んで喜んでいた走幅跳選手の3人が近くに来て、一か八かで、「サインプリーズ」と声をかけてみた。すると、その3人は笑顔で、ペンとメガホンを受け取って、サインを書いてくれた事だ。その日、私は一番前の席だったので、みんなの分もお願いした。試合を終えて、疲れているはずなのに、嫌な顔を全くせずに、サインをたくさん書いてくれた彼女達の事は、一生忘れないと思う。

この3つの出来事をふまえて、人の温かさは本当に素晴らしいと思った。200メートル走では、障害の有無関係なく、選手とガイドランナーのきずながあったこと。その日、出会ったばかりの人と、喜びを分かち合っていたこと。誰にでも、笑顔を絶やさずに接してくれたこと。本当に素晴らしくて、障害をかかえていても、明るく大きな目標に向かって、努力して、試合にでてる選手達の姿は、とてもまぶしかった。私に、夢に向かって挫折しそうなことがあっても、努力していこうと思わせてくれた選手に、感謝の気持ちを伝えたい。

佳作作品

中学生の部

ワタシとアナタ



神戸市立神陵台中学校

3年 若松 華瑠亜

私の家族には車いすを必要とする人がいます。高校生までは私たちと同じように生活をしていましたがそこから少しずつ体が動きにくくなってきました。私は一緒に住んでいないので、どのように生活をしているのかをよく分かっていませんでしたが、遊びに行ったときに家での様子を見ていろいろなことに驚きました。家の作りも車いすに乗ったままでもスムーズに畳に移動することができるように畳の部屋もその高さに作られています。他にも電気やエアコンなどは声に反応して動いてくれるAIがあり、家に1人でいても自分の力でできるように工夫されていました。彼女は歩くことは難しいですが手を動かすことは出来るので会社に行き仕事もしています。しかし、外での生活ではまだまだ不自由なことも多いです。例えば、10cmの段差です。たった10cmと思うかもしれませんが、車いすでは上がることはできません。周りの人の手助けがあっても大人をおんぶしたりすることは簡単ではないし、無理に動かすと痛かったりもします。こんな時近くにスロープがあるだけで行きたい所にも行くことができます。しかし、これは実際にそういう人と関わって初めて知ったりすることができることだと思います。他にもお店での食事でも車いすが入ることのできる間隔がないとみんなで食事することも難しいです。行ってみたいお店でも諦めないといけません。スーパーなど高い棚の物があっても自分でとることは出来ませんがお互いがそういったことを理解していれば自然と声をかけることもでき、その商品を買うこともできます。

全てをかなえるのは難しいことですが、私たちの少しの思いやりや理解によってお互いに気持ち

のいい社会になると思います。わざわざそういったことを体験できるイベントに行かなくても生活の中でそういった場面に出会ったらやってみればいいと思います。優しさと勇気があれば心の輪は広がっていくと思います。

佳作作品

高校・一般の部

赤いインク



らん

「赤いインク」ってね、小さな試験管の中だと赤く染まる。だけど大きな浴槽の中だと赤いインクは水で薄まる。

これは、私の大学院の指導教員が私が周りと違うことで苦しんでいることを打ち明けた時にしてくださった話である。私はこの話の意味が全く分からなかった。「一歩ずつって言ってごらん？」私はこの話が出た時にそう言われた。私は訳も分からず迷わず「一歩が長いです。」と答えた。すると、「どうして？あなたは確実に前に進んでいるよ。こうして学校に来ることができているのも、生きていることも、一歩進んでいること。」私はこれはみんなができていた当たり前のことであるとはかと思えず、指導教員の話が理解できなかった。すると「みんなは赤いインクがないでしょ？あなたは赤いインクがある。ハンデを背負ってしまった。だからこそ今こうして皆と過ごしていること、頑張ることができていること、前を向くことができていること、夢を追いかけていることに大きな意味があるのだよ。」そう教えてくださったのだ。赤いインクというハンデを背負ってしまったからこそ気づくことができるようになったものもあるよねとも。

私は初めて精神疾患、性被害の後遺症からPTSDに苦しんでいることを指導教員に打ち明け

た。私が性被害に遭ったのは小学生の頃であるが、小学生から今までお世話になった先生方、誰一人に対しても言ってこなかった。そんな中私を救ってくださったのは大学院の指導教員であった。私は恥ずかしながら大学院を留年した、つまり現在大学院に在籍して3年目となる。大学院に進学したのは叶えたい夢があったからであり、現在目指しているのは公認心理師・臨床心理士である。誰もが笑う夢かもしれないし、私も実現できるには程遠い未来であると頭では分かっている。だが、私にはこの夢が譲れないのだ。

私は「心理師を目指す。」そう約束した方々がいる。一番大きなきっかけとなってくれたのは、当時どん底にあった私を担当してくださった心理師さんであった。この方に出逢わなければ今の私はいないと言っても過言ではない。どんな私でもありのままの私を受け入れてくれたのだ。また、人に助けを求めてもよいのだ、1人で苦しまなくてもよいのだ、そう思わせてくれたからである。ある日、私の主張が強すぎて心理師さんを困らせてしまったこともあった。だが、この時も、私が面接室を出てから夜8時頃病院が暗くなるまでずっと待っていてくれたのだった。「あなたのことを見捨てないよ。」そう思わせてくれるきっかけとなった。誰にも打ち明けられなかった過去、誰にも理解されなかった過去が私の人生の半分以上も占めている。私はこんな誰かに受け入れてもらえるという経験が初めてであり、私自身もこの心理師さんと同じように誰かを助ける存在でありたいと強く思うようになった。また、現在毎週診てくださっている主治医の存在もとても大きい。「あなたなら大丈夫。あなたならできるよ。傷ついたからこそ人の痛みになんか近づくことができる。痛みを抱えることができる。」そう伝え続けてくださる。2週間に1度面談の時間を設けてくださる指導教員も、留年し同期と卒業できなかったことで喪失感に襲われ絶望の中にあつた私を救ってくださっている。

でも本当に私はこのまま夢を追い続けてもいいのか、私は自問自答を繰り返しているが本当の答えは分からない。もしかすると、この道はハンディキャップを持っている人には無理なのかもしれない。安易に自分の傷つき体験があるからといって、心理の道を選択することは間違っているのかもしれない。それは赤いインクはあることに違いはなければ、赤いインクが消えることもないからである。性被害の苦しみはおそらく、皆が思っているほど簡単で単純なものではなく、実際には深刻で複雑で大きく、人生の多くが狂わされる。だが近年その被害者は増え続けていることも事実であり、このようなニュースを見るたび心が痛む。

このような苦しみの中にあるが、私はいつか証明してみせたい。たとえハンディキャップを持っていたとしても、諦めなければ実現できるものがあるということ。実際、私はこの夏大きな挑戦を試してみた。それは「トラウマティック・ストレス学会」という大きな学会でポスター発表をするということであった。この学会は2日間に分かれて行われたがなんと初日は約500名もの参加者がいたそうだ。ここでも一つ「ハンディキャップ」を持っていても、物事をしっかりとこなし、やり遂げることができるということをしかりと自分で証明してみせた。

「ハンディキャップ」をもっている人は残念ながら世間からは「障がい者」として扱われてしまうことが多い。そんな時、私はいつも疑問に思う。それは誰がいつ「障害」と名付けたのかということ。確かに障害や生きている間に生きにくさという障壁に直面することが多いかもしれない。ただ、そこで世間が「できない」や「間違っている」と決めつけてしまうことの方が好ましくないのではないかと感じる。

私が志したいことは、夢を最後まで諦めず追い続けることだ。だが症状が少しずつ顔を出し始めているのも正直なところである。少しずつ生きにくくなりつつもある。ただ、私はこれだけはメッ

セージとして今まで私をサポートし、ずっと支えてくれた人に伝えたい。「赤いインクは私が出会うことのできた大切な気づきだった。私の中で必要な気づきを得ることの時間が与えられたのだった。」ということ。そしてこの言葉と共に気持ちを届けたい。「ありがとう。今、私、幸せだよ。」と。

佳作作品

高校・一般の部

豊かな社会の実現

神戸市立神港橋高等学校

3年 郷原 芽依

私は数年前、ボランティア活動を通じて障害がある方々と触れ合う機会を得ることができました。その経験は私の人生観を大きく変えるきっかけとなり、共生社会の実現に向けて新たな視点を獲得することができました。

その日は、地元の障害者センターで行われるアートセラピーのワークショップに参加しました。最初は緊張していた私でしたが、センターに到着してみると、そこには笑顔で迎えてくれる多くの方々がありました。車椅子に乗った人、聴覚障害のある人、そして知的障害のある人まで、多様な障害を持った方々が集まっていました。

ワークショップでは、私たちは一緒に絵を描いたり、陶芸をしたりしました。最初はコミュニケーションに戸惑いを感じましたがそのうちに自然と距離が縮まり、会話が弾むようになりました。彼らの笑顔や純粋な表現に触れるうちに、私も自分の心が開かれているのを感じました。

特に印象に残ったのは、車椅子の方と一緒に絵を描いたときのことです。彼は手元が不自由なため、描くのに苦労していました。そこで私は、彼のサポート役として一緒に作品を完成させることに専念しました。最初は私が手を添えることで、彼の不安が少し和らぎ次第に自信を持って筆を動

かすようになりました。完成した作品を見て、彼の顔が輝いているのがとても印象的でした。

この体験を通じて、私は障害がある人とないない人の心の触れ合いの大切さを痛感しました。彼らは日常生活の中でさまざまな制約や偏見に直面していますが、その中でも豊かな人間性と深い魅力があることを改めて知りました。彼らとの交流を通じて、私の中で共感や思いやりといった感情がより深まり、自分自身も成長することができたのです。

また、この体験を通じて、共生社会の実現に向けて新たな視点を得ることができました。障害がある人とないない人との間には、物理的な障壁やコミュニケーションの壁が存在するかもしれませんが、その先には人間としてのつながりや理解が待っています。共生社会を実現するためには、私たちが互いの違いを認め合い、支え合うことが重要だと感じました。

さらに、この体験を通じて、多様性を受け入れることの大切さを再認識しました。社会には様々な人が存在し、それぞれの個性や能力を尊重することが、より豊かな社会を築く第一歩だと思います。障害がある人もない人も、誰もが共に生きる社会が実現するためには、偏見や差別を排除し、互いを尊重し合うことが不可欠です。

この体験を通じて得た気づきや考えは、私の人生観を大きく変えるものでした。これからも、障害がある人とないない人が共に生きる社会を実現するために、私自身ができることを積極的に探求していきたいと思っています。共に生きることの尊さと豊かさを伝え、共生社会の実現に向けて、私の小さな一歩が大きな影響を与えられるように努めていきたいと思っています。

障害がある人とないない人が共に暮らす共生社会の実現は、私たち一人ひとりが心を開き多様性を受け入れることから始まります。誰もが自分らしく生きられる社会を築くために私たちが互いを理解し、支え合うことが必要です。この体験を通じて

得た気づきや経験を活かし、日常の中で障害がある人を含めた多様な人々との交流を大切にし、互いを尊重し合う姿勢を持つことが大切だと感じました。

共生社会の実現に向けて、私たち一人ひとりができることはたくさんあります。まずは、自分自身が偏見や先入観に立ち止まり、他者を受け入れる姿勢を持つことが大切です。また、地域のコミュニティ活動やボランティア活動に参加することで、障害がある方々との交流の機会を作ることでも重要です。さらには、法律や社会制度の改善に向けて声を上げ、共生社会を推進することも必要です。

共生社会の実現は簡単なことではありませんが、私たちが一歩一歩前に進み、互いを思いやる心を持ち続けることで実現できると信じています。私自身も、この体験を通じて得た気づきを胸に、共生社会の実現に向けて積極的に行動し、貢献していきたいと思っています。

障害がある人とないない人が共に暮らす共生社会の実現は、私たち一人ひとりの意識や行動が重要な鍵を握っています。私たちが互いを尊重し、支え合い、共に成長する姿勢を持ち続けることで、より豊かな社会が実現できると信じています。



「思いやり」「譲り合い」「助け合い」

福祉の心を育む神戸の市民運動

ふれあいのまちKOBE・愛の輪運動



令和6年度

温かい手

編集・発行 社会福祉法人 神戸市社会福祉協議会 地域支援部
ふれあいのまち KOBE・愛の輪運動推進委員会
神戸市中央区磯上通3丁目1-32
こうべ市民福祉交流センター4F

TEL (078) 271-5317
FAX (078) 271-5366

神戸市 福祉局 障害福祉課
神戸市中央区加納町6丁目5-1

リサイクル適性[Ⓐ]

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

この冊子は、神戸市社会福祉協議会が設置する社会福祉推進基金に寄せられた寄付金を一部使用し作成しています。